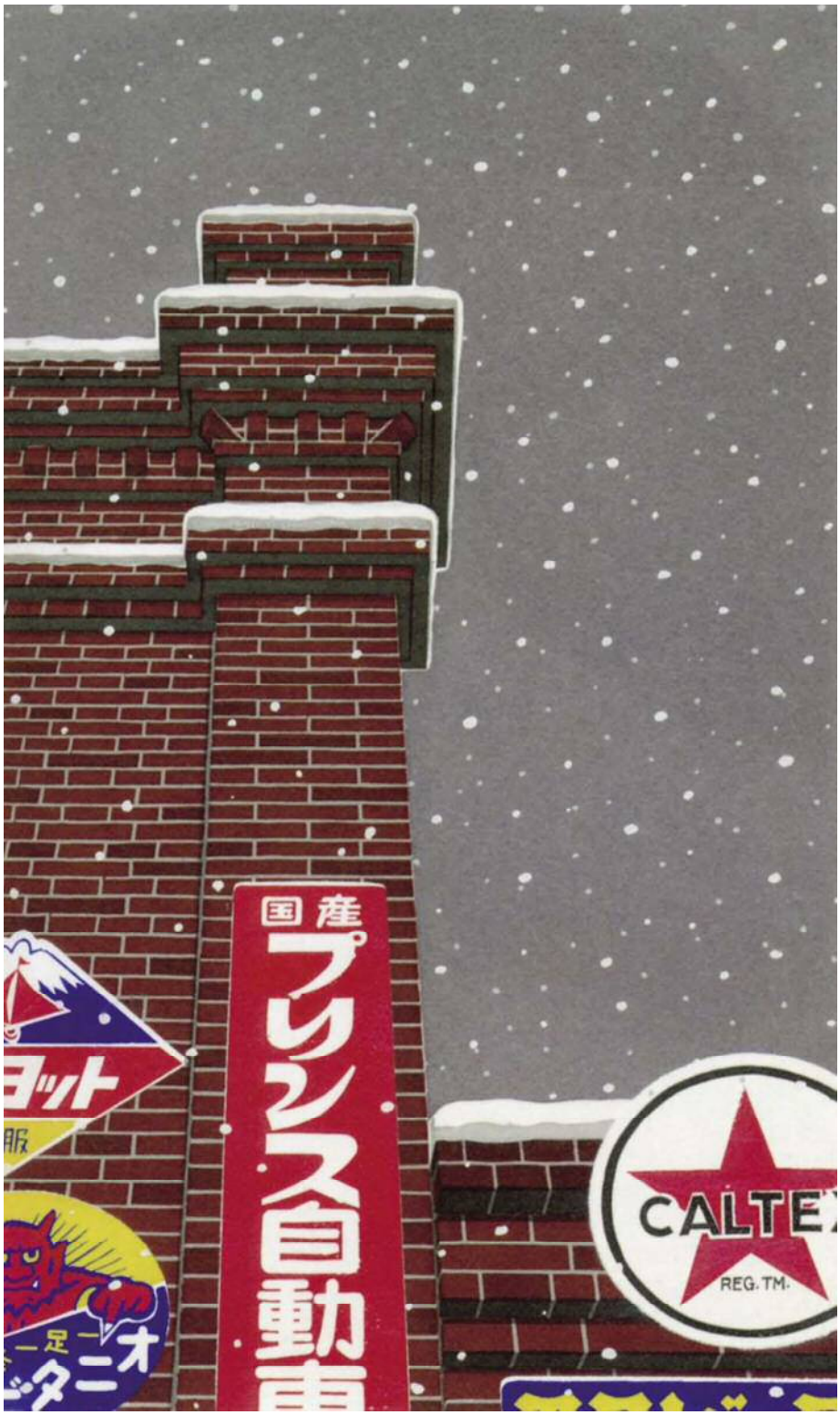
いしづち

2017.1

No.114

公益社団法人 愛媛県建築士会
http://www.ehime-shikai.com



故きをたずねて　豊島家と渡部家
自然と家とにんげんと　美しさに惹かれて…
基礎のこと　愛媛基礎工事業協同組合の活動1

ISHIZUCHI
Ehimeken kenchikushikai
2017 1
JANUARY No.114

CONTENTS

1	新年にあたり		会　長	寺尾　保仁 ……①
2	年男・年女の抱負		新居浜支部	赤木　秀規 ……②
				彦坂　直弥 ……②
			西条支部	佐藤　信吾 ……②
			今治支部	垣谷　光慶 ……②
			松山支部	井上　竜治 ……②
				山内　知照 ……②
			八幡浜支部	林　一夫 ……③
			西予支部	稲田　幹成 ……③
				亀岡　俊治 ……③
			宇和島支部	水野日出夫 ……③
3	故きをたずねて	第10回　豊島家と渡部家（松山市）	文化財・まちづくり委員会委員長	花岡　直樹 ……④
4	自然と家とにんげんと	美しさに惹かれて…	今治支部	橋詰　飛香 ……⑥
5	基礎のこと	愛媛基礎工事業協同組合の活動1	愛媛基礎工事業協同組合	田中　清久 ……⑦
6	光のはなし	フランク・ロイド・ライトの建築見学02	宮地電機㈱	田部　泉 ……⑧
7	竹のはなし	「エピソード編」（1）	山田竹材	山田　清昭 ……⑨
8	くさぐさの風景	秋の紅葉と実のこと	松山支部	安藤　雅人 ……⑩
9	雑想	遊び	松山支部	玉乃井公和 ……⑪
10	第59回建築士会全国大会（大分大会）各支部報告		西条支部	越智　忠美 ……⑫
			今治支部	森　昇平 ……⑫
			松山支部長	赤根　良忠 ……⑬
			大洲支部長	神田　孝一 ……⑭
			西予支部長	亀岡　俊治 ……⑭
			宇和島支部長	大内　寛司 ……⑮
	第7回建築士フォーラムin大分		今治支部	青陽　孝昭 ……⑯
11	ヘリテージマネージャー養成講座報告			
		第4回講座　講師	文化財・まちづくり委員会委員長	花岡　直樹 ……⑰
		第5回講座　講師	文化財・まちづくり委員会委員長	花岡　直樹 ……⑲
		第6回講座　講師	愛媛県建築士会副会長	酒井　純孝 ……㉑
		第7回講座　講師	文化財・まちづくり委員会委員長	花岡　直樹
			近代建築遺産活用アドバイザー	岡崎　直司 ……㉓
12	支部報告	建築巡礼in松山Ⅷ	松山支部	久保　孝 ……㉕
		松山支部青年・女性委員会主催勉強会報告	松山支部　青年女性委員会副委員長	大内　雄志 ……㉖
13	委員会報告	建築文化市民講座　細川家住宅改修工事見学会報告	四国中央支部	遠藤　禎誌 ……㉗
		玉井家（伊予市上野）測量調査	文化財・まちづくり委員会委員長	花岡　直樹 ……㉙
		支部対抗ソフトバレーボール大会報告（優勝チーム）	西条支部	篠原　健治 ……㉛
		（最下位チーム）	今治支部	選手一同 ……㉛
		とびだせ建築士（愛媛大学付属中学校章光堂）に参加	松山支部	河野　行信 ……㉝
		「八幡濱　港拓　2016」における子どもガイドの育成	女性委員	眞田井良子 ……㉝
		しまなみアートツアー	女性副委員長	近藤　佳代 ……㊵
		第2回建築士会館建て替え検討委員会報告	会　長	寺尾　保仁 ……㊶
14	けんちくの輪	出合い	四国中央支部	岸　良一 ……㊷
		建築の輪	西予支部	渡辺　建文 ……㊸
15	お知らせ	平成28年度 第5回理事会概要報告		事務局 ……㊹
		専攻建築士（新規・更新）登録申請受付期間について		事務局 ……㊺
		編集後記		……㊻

※ 尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。

新年にあたり

会長　寺尾　保仁

あけましておめでとうございます。

日頃は士会活動に参加ご協力を頂きまして有難うございます。昨年はヘリテージ養成講座の開始、行政協力の一環として木造耐震診断の一括受注、会費値上げの審議、会館建替えの審議と、本会の活動・運営両面に渡り歩みを一歩進めた年ではなかったかと思います。

本年も引続き 会館建設に向けて協議して行きたいと思っております。会館の建設に当っては、平成 22 年耐震診断・耐震設計を行って以来、平成 26 年ころより本格的に検討を始め、平成 28 年度総会において報告、検討委員会の立上げとなりました。被災時において本会館が大きなダメージを受けた場合、応急危険度判定はもとより 災害復旧の基点を失うこととなります。また 耐震診断・改修を奨める立場である本会は、進んで改修を行うべきだと思いまして、皆様にお諮りして検討の結果、立替工事に決定致しました。できれば今年中の着工を目指したいと思っております。是非とも会員の皆様にご理解の上ご協力願いたいと思っております。

先日、連合会の中四国ブロック会の折、建築士の定期講習の受講期間が 3 年から 5 年に変更される事を国が検討している事について、意見を求められる事がありました。単に受講者の立場としては期間が長くなるのはいいかと思う反面、昨今の目まぐるしい規準改正、技術進歩を考えると、5 年は長すぎるように思えます。また、現在、設計従事者に対して行われているこの制度については、本来の定期講習の意義を考えるに、全ての資格者に対して必要ではないかと思います。設計以外の業務の方は講習受講が不要かと考えると、そうは思えません。この際に全ての建築士を対象に定期講習が行われるべきであると思います。そうすれば今不確定な建築士の実態調査を兼ねる事が可能になります。建築士の社会的立場の充実と、建築士としての技術の研鑽には、まさに建築士会入会者の拡大が有効であります。

今年も会員増強と会員資質の向上を重点に活動したいと、年の初めに気持ちを新たにしております。皆様のより一層のご活躍を祈念致します。

ご報告

平成 28 年 10 月 15 日兵庫県神戸市において熊本地震に際しての応急危険度判定士派遣に対し、国土交通省住宅局長感謝状の授与式が行われました。高円宮妃殿下ご臨席の下、式典が執り行われ、その後授与式となりました。表彰は連合会始め派遣単位会それぞれの名前が読み上げられた後、各自檀上で直接表彰状の授与がありました。連合会会長、専務、各士会から 4 名が出席しました。本県からは私が出席しました。

派遣された方々、待機していただいた方々本当にご苦労さまでした。

年男・年女の抱負

平成二十九年の抱負

新居浜支部　赤木　秀規

建築の世界に入り早 41 年がたち『還暦』を迎える歳となりました。若い時は年上の職人さん達に、『この若造が』という目で見られ早く年を取って同じ目線で話がしたいと云う気持ちでいっぱいでした。それが今ではあと 20 歳若ければこんな事も出来たのにこういう事もやりたかったのにと後悔して居ります。現場監理中心の 41 年でしたがこのたび建築士会に入会させていただき建築士という立場と現場監理という立場からいろいろな事に挑戦し後何年かこの世界に留まりたいと思っております。入会 1 年目ですが今後共宜しくお願いします。

新居浜支部　彦坂　直弥

建設業界に脚を踏み入れ早 15 年経ちます。15 年間の間で様々な建築物に携わってきましたが、まだまだ知識不足だとつくづく感じております。その為、少しでも知識を得るため常に向上心を持ち続けて講習会への積極的参加や業務に関する資格を習得していきたいと考えており、最終は建築最高峰の資格とされている建築士の習得を目標としております。

建築士は私の天職

西条支部　佐藤　信吾

新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては穏やかなる新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。私は岩手県出身ですが結婚を期に愛媛に住み、建築士と成りました。今は子供 3 人、孫 8 人の子孫に恵まれ、妻と二人幸せの毎日を過ごしております。昨年の十月にやり慣れてない畑仕事をして左足小指を骨折しました。自分ではまだ若いと思っておりましたが年をとった証で動きが鈍くなっておりました。体は年をとっても仕事はまだまだ青年です。これからも、建築士は私の天職とし気力、体力のある限り頑張っていきます。皆様と共に、組織・仕事など通じ社会貢献に励みたいと思います。本年も何卒宜しくお願い申し上げます。

ブラボー !! バタバタ酉

今治支部　垣谷 光慶

酉年はせっかちで「バタバタ貧乏」だそうだ。確かに我が身の性格も生活も相変わらず落ち着きがない。

そんな中、「世界のことがわかってきたような気になるのは、わからないものを切り捨てていくからである。」という養老孟司氏の言葉に出会った。わからないけれどこれは大事と知ることこそ大切なのだと。還暦が第二の人生の始まりというなら、六十になって今さら … と思わず、わからないことに向き合い新しいことを知ろう。耳順う素直さと好奇心の持続を願っての一年の始まりだ。

さあ、まずは減量から始めよう。目指せライザップ !!

これからの自分

松山支部　井上 竜治

この年男の原稿依頼があるまでは、自分が年男である事を意識していませんでした。これを機会に少し考えると、平均寿命からいえば残り 30 年程、もちろん、仕事は一笑懸命ですが、マラソンやゴルフ（下手ですが）の他に、一生続けられる趣味を見つけたいと思います。

また、大ヒットした映画『君の名は』を妻と観て、妻は「思い出を忘れるのは辛いね」と、言っていましたが、私は、最後にお互いが出会い、これから始まる明るい未来を感じて、スッキリしました。感じ方はいろいろあるが、過去を振り返らずに未来（まえ）を向いて進んでいける、健康で元気なかっこいいおっさんになりたいと希望も含め考えるいい機会となりました。

時間を大切にして

松山支部　山内　知照

今年 5 度目の年男を迎え、まず思うのは健康に留意することです。怠りがちなウォーキングの継続・食生活の改善などを実践していきます。仕事のほうでは耐震・省エネなどで新しい法律・工法などが次々でてきているので、それらを講習等で学び生かせていきます。また愛媛国体のボクシング競技が、松前町で開催されるのを役員としてサポートしていきます。他には今までできなかったこと（島の美術館巡り・スケッチ・ウクレレ演奏など・・）にもチャレンジできるように、時間を大切にして頑張っていきたいと思っています。

しめ（トリ）の年を迎えて

八幡浜支部　林　一夫

新年明けましておめでとうございます。早いもので、今年で５回目（還暦）の年男を迎える事になりました。

２回目の年男（24 才）で結婚をし、３回目の年男を迎える頃までは、主に公共施設の実施設計・監理をさせて頂き、公私共に充実しておりました。

４回目の年男の頃は、業務内容が建築から都市計画へと変わり、新たな気持ちで仕事に向かう事が出来て、視野も広がり大変勉強になった時期でした。

そして市役所の正職員として最終年度となる５回目の年男、最後は感激（カンレキ）出来るしめ（トリ）の年になればいいなあと思います。

還暦を前に思うこと

西予支部　稲田　幹成

♪思えば遠くへ来たもんだ、ふるさと離れて六年目。

還暦を前にして、ふと武田鉄矢の昔の歌を口ずさむ。

結婚し、家庭を築き、今年孫も誕生した。今は体力の衰えを少しは感じているがまだ本当に認めてはいない。

仕事だって、趣味だってまだまだ時間が足りない。

ただ体だけが馬鹿正直に反応してしまう事がある。

20 年ほど前に厄落としと称し大勢を呼んで酒を飲んだ事を思い出す、来年には還暦の祝いをしてくれるそうだ。この、あっという間に過ぎた 20 年の間には色々なことがあった。それらが今、友人たちと飲む時の良いつまみになっている。苦しい記憶は忘れないが、持ち出そうとはしない。楽しい昔話は酒の良いつまみである。

私の廻りには、まだまだ元気で気力十分な大先輩たちが沢山いる､その中に入れば私などまだまだ若造である。元気盛んな後輩との交流会も色々持っている、その中ではいつの間にか私は年長者である。誰でもそうだが私たちは常に先輩と後輩の間にいる。これからも先輩方から教えられた事や私の経験を少しでも後輩たちに継承することができれば良い事だと思っている。

家族にも感謝をしている。妻とは 19 歳の時知り合ってから 40 年間一緒に生きてきた。同学年でぶつかり合うことも有ったがいつの間にか二人とも年をとって、ぶつかる前にかわすようになった。（笑い）

これからも健康で楽しい日々を共に過ごしたいものである。

♪思えば遠くへ来たもんだ、この先どこまでゆくのやら

え！もう？

西予支部　亀岡　俊治

題名の通り、えぇ？という感じです。そう数えること５回目？の年男・・・・。還暦ですがな。いやはや人に言われなければ気づかず 30 代の気分で過ごしておりました（笑）。まぁ～、人から見ればおじいさんにみえているんだろうな～～。と思いながら鏡の中の自分を見れば確かにおじいさん（爆）。とはいえ、引退には早い！いまどき 60 といえばまだまだお年頃！やりたいこともたくさんあるしやり残していることも山ほどあります。やり遂げることは無理かもしれないけれど、還暦を機に何をやったかではなく、何の為にやるのかという視点に変えてこれからもほどほどに頑張っていこうと思ふ今日この頃・・・・。

『年男＝還暦』

宇和島支部　水野　日出夫

昨年、還暦を前に 70 名程度が集まり高校の同窓会を開催しました。中には風貌も変わりこっそり名札を見なければわからない人もいます。この年になれば皆さん同じでしょうが話しの内容は健康と子供の事が中心です。しかし高校時代の話しをする時は眼も輝き、お互いあの頃の姿が蘇ります。私自身もそうですが誰もが気持ちの面ではいつまでも若く、後はいかに健康面での充実を計るかがこれからの課題の様です。

私は２年前よりマラソンを始めました。10km マラソンから始め昨年はハーフマラソンの３大会に出場し、今年は夫婦で愛媛マラソンに出場をする予定で、まずは完走を目指しています。

幾つになっても建築の仕事に関わっていたいと思っています、その為にもまずは『体・健康が一番』です。

そんな些細な事が私の今年の抱負です。

第10回　豊島家と渡部家（松山市）

文化財 . まちづくり委員会委員長　花岡　直樹

松山市に、国の重要文化財に指定された庄屋建築が２件あるのをご存知でしょうか。豊島家住宅（松山市井門町）と渡部家住宅（同東方町）です。今回は、建築年代や庄屋の格、建物の規模や造りの違うこの２つの主屋を比較してみたいと思います。

豊島家は各村単位にあった庄屋を総括する「大庄屋」で、主屋は宝暦８年（1758）の建築、床面積はなんと約 130 坪に及びます。平面的には座敷部と居室部の間に、ニュートラルコーナーとでもいうべき取り合い部（南小間と広間）が挟まれた形になっていて、居室部の東には広大な土間が広がっています。

豊島家主屋全景

庄屋といえども農民階級なので、屋根は下屋を除いて茅葺きです。その屋根が複雑な平面に合わせて架けられているため、棟がＺ型になり、外から見るととても複雑に見えるため「井門の八棟造り」とも呼ばれていたそうです。でも実際は、棟は３つしかないので、「八棟」とは少し大げさかもしれません。

棟が直行しＺ型の複雑な屋根

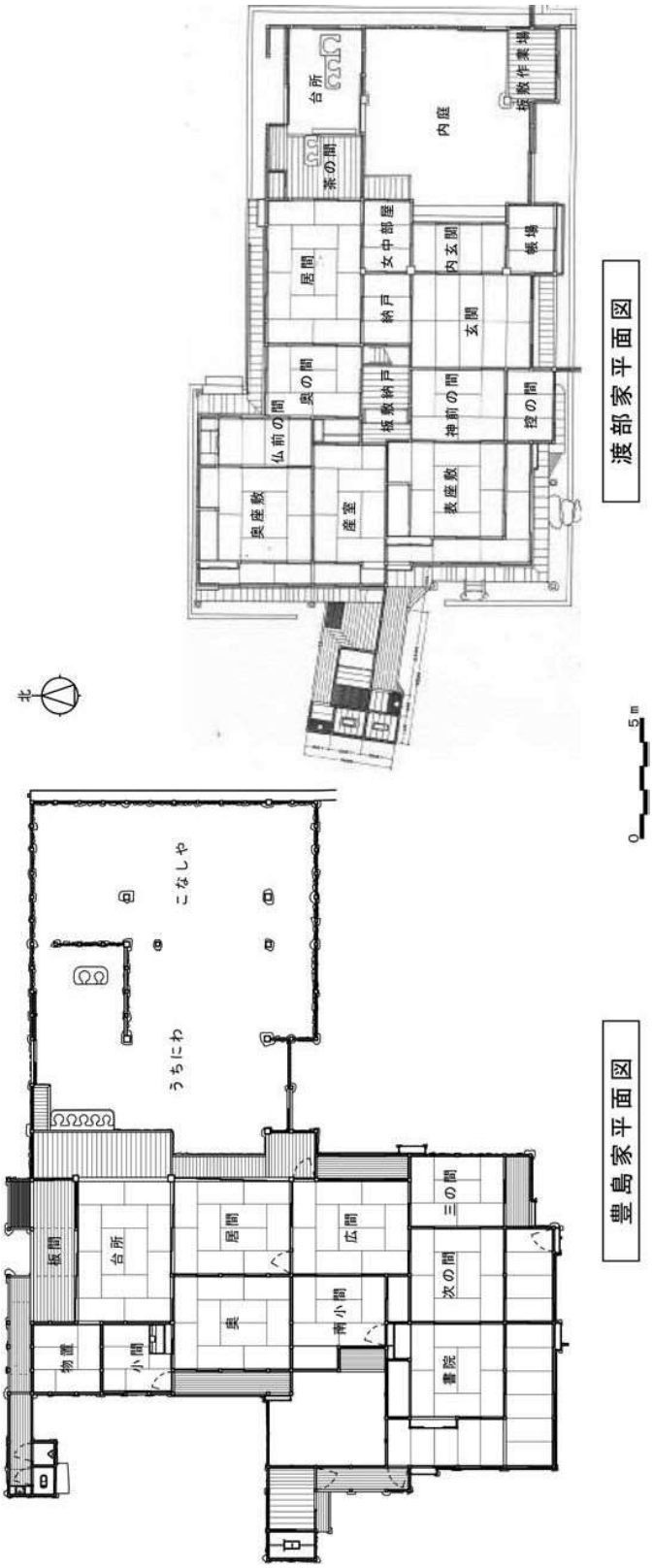
これに対して渡部家の方は、大庄屋の補佐役として置かれた「改（あらため）庄屋」でした。慶応２年（1866）上棟ですので、本当に幕末の建築です。床面積は約 98 坪と、豊島家よりは少し小さめですが、豊島家と同様に座敷部と居室部の間に産室、納戸、女中部屋などの取り合い部を挟んだ形となっていて、東側には土間が広がっています。平面的には豊島家よりも長方形に近い分、屋根も単純な形になっています。

渡部家主屋全景

屋根は大屋根も瓦葺きとなっています。茅葺きでなければいけないはずですが…。でもよく見ると棟の越屋根に小さな茅葺き部分が見えます。これで「我が家は茅葺きだ」という言い訳だったのでしょうか。平成 21 年度に行われた茅の葺き替えの時の調査で、一度仕上げた瓦を解体してこの茅葺きの越屋根をあとから作ったことが判明しました。時代も時代なので瓦屋根で許されるだろう、と建築していたところ、藩からの修正の指示があったのかもしれません。

土間部分の何重にも重なった小屋梁は、とても見応えがあります。安政の大地震（1855 年）の後だったので、構造的に強固な架構にしたとも考えられますが、見える丸太梁一本一本に丁寧に鉋が架けられているところを見ると、実際は家の格式を示し、荘厳に見せるための演出だったと考えられます。

今回、ふたつの建物の平面図を同一縮尺で付けています。是非比較しながら、江戸時代の庄屋の暮らしに思いをはせてみてください。



渡部家平面図

豊島家平面図

美しさに惹かれて・・

今治支部　橋詰　飛香

昔ながらの家づくりの現場は美しいです。

それまで手掛けてきた現代的な家づくりの現場とは、まったく次元を異にする世界がある事を感じます。

以前の家づくりでは当たり前のように現場を占めていた建材や工業製品の類はなく、替わりにさっき山から採ってきたと言わんばかりのような薫り立つ木や竹や土や藁などの純粋な自然の素材たちが家を形づくっており、現場に漂う空気感がそれまで感じたことが無い様な心地よさに満ちています。その圧倒的違いに衝撃を受けた事をよく覚えています。

出来上がっていく家の瞬間瞬間の光景は、一片の花の様に自然界の造形に通ずるような美しさがあり感動がつきません。設計者としては、自然が織りなす造形は神の領域が生み出す手の届かないお手本の様なもの。ここ建築現場にその一片を感じたとき、叶うことのなかった美しさに一歩近づけた様なそんな気がしたものです。

昔ながらの家づくりには職人が自然の素材たちと対話し、長い時間のなかで最も道理に叶った姿として、人と自然との対話によって生まれた美があります。職人の所作にしても道具にしても美しく、ずっと眺めていても飽きない。手間暇かけ刻み組まれた木材が威風堂々と雄々しい迫力を放っていたり、花籠のように編まれた竹小舞が凛とした空気を放って光を透かしていたり、母なる大地の土が壁となって柔らかく優しい感じにと・・。無造作に置かれた材料さえも私の目には感動をもって映りました。

建築現場にこんなにも五感を刺激し感動を与え語りかけてくるような美しさが今あるでしょうか・・。雑然と並べられた建材の山や無機質な素材のオンパレード、汚れては使い捨てにされる養生シートの山、それは決して人目には触れてはいけない姿であり、完成をもってこそ見る事のできる家ではないかと思うのです。

そして現場に産業廃棄物のゴミ箱がないというのはとても爽快で心地よい事です。出てくる残材の多くは、木や竹、藁、土、梱包のダンボール・ビニールといった物で、リサイクル出来るものは再利用し、自然の材料はその家の薪ストーブの燃料とし喜んで頂けます。本当にどうしようもないゴミを最小限に抑えられます。以前は自然に還らない建材たちがゴミ箱から溢れていたというのに・・眼を覆いたくなる様な事がないというのは本当に心の底からの清々しさを感じるものです。

このように目に見えるものだけではなく隠れたところや内から放たれる美しさも、目に見えないエネルギーとなって心地良さとか幸せ感とか安堵感として顕れてくるのではと考えます。

美しいものは芯から美しいのです。身繕いなどせずとも、ありのままの姿で。そして生み出され造りあげられていく過程、老いて朽ちていく過程も含めて全てに美しさが存在しているような気がします。この美しく心地よい空気感が何よりも住む人に、いえ、数限りないすべての万物事象に恩恵を与えてくれると感じるのでした。

手掛けた家々たちは、年月が経つほどに大地に受け入れられるが如く、深い味わいと美しさを増していっています。そういった家々たちをこれから先、生涯に渡って見続けていられるのは設計者の楽しみであると言えます。しかも100年以上は持ちこたえるようにと願って設計した家。設計者の寿命より遙かずっと先まで遺っていくことは間違いなく、その100年先にこの家が地域に人々にどのように映っていくのか・・想いを馳せつつ、次なる昔ながらの家づくりに向う設計者でした。

愛媛基礎工事業協同組合の活動 1

愛媛基礎工事業協同組合　田中　清久

高度成長期から成熟期に入った日本は、物が溢れ娯楽が充実し、仕事に没頭することを美とした時代から、心身共にゆとりのある生活を望む時代になりました。企業は人を選ぶ側から選ばれる側へと変化し、求職者も自分に合った企業が見つからなければ無理に就職をしなくなったようにも思われます。建設業界は度重なる不況の影響を受け、企業が生き残るためにあまりにも「人」を無視しすぎ、このギャップに順応できていなかったのだと思います。

基礎工事業界も然り、いま抱える一番の問題はなんといっても人材の不足です。

リーマンショックの前でしたら、募集をかければ１週間で何人かは応募してきたものですが、今は年に１～２人の応募があれば良い方です。また､２～３年経ってからの離職率が非常に高く、ようやく仕事を覚えてきた頃に辞めてしまいます。これは経営者だけではなく、そこで働く社員にとっても精神的に大きなダメージとなり、経営者は育てる労力を惜しむようになり、社員は自分の将来に不安を感じて離職の連鎖を繰り返します。

この時代と社会の変化に順応できていなかった私たちが、反省し改善していかなければ、人材不足の問題は改善されないことにようやく気付きました。今は人材が不足しているだけであっても、団塊の世代が完全リタイアした後には人材は枯渇し、事業の継続すら困難な時代がやってくることは間違いないでしょう。

早急な対応が必要ではありますが、前述のとおり反省し改善するならば、先ずは自分たちが人を育てる仕組みを考え、働きやすい環境を整え、その経営環境を改善する努力を惜しむべきではないと考えます。なぜなら自分たちが生きる業界ですから、自分たちが動かなければ、決して誰かが・いつか・どうにかしてくれるものではないからです。

とはいえ、企業単体でいくら努力しても、業界に対する社会的なイメージの払拭はできるものではなく、やはり基礎工事業界全体が改善され魅力あるものとならなければなりません。そして、それを社会に広く知ってもらうことが重要となってきます。

少し余談になりますが、

「知ってもらわなければ存在していないのと同じである。」これは愛媛新聞の鈴木孝裕氏の広報情報化のセミナーで教えていただいたことで、例えどんなに素晴らしいことをしたとしても、社会に知って貰えなければ何もしていないのと同じこと、存在していないのと同じことという事を教わり、広報の重要性を初めて知った瞬間でした。それまで私は、周囲に対してアピールすることには消極的でしたが、この瞬間から積極的に広報を行うことを決意し、今回の執筆も取り組ませていただいています。

ましてや、私たちの基礎工事業界のこと、そして全国でも初となる「愛媛基礎工事業協同組合」のことを、建築士の方々をはじめ、広く社会に知っていただける絶好の機会ですので､真剣に書かせていただいておりますし、愛媛県建築士会の広報委員の方々にも、このような機会を与えていただいたことに深く感謝をいたします。

話は戻って、この業界を自分達の子供に継がせられる業界にしたい、人材溢れる魅力ある業界にしたいという熱い想いを持った企業が集まり「愛媛基礎工事業協同組合」を設立いたしました。

（詳しくは組合のホームページをご覧ください･･･「愛媛の基礎工事」で検索）

団体として取り組むべき課題は山積みではありますが､次回より「人材の確保と育成」「適正な工事価格」「設計と施工」「社会・経済・政治的な環境の改善」について順に執筆させていただければと思います。ご拝読いただき有難うございました。

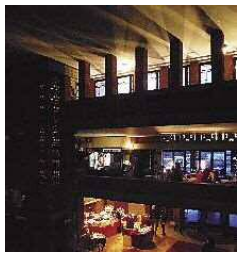
フランク・ロイド・ライトの建築見学 02

宮地電機（株）　田部　　泉

2013 年 11 月には、『帝国ホテル中央玄関』（1923 年竣工後、1968 年解体されて、愛知県犬山市の明治村に 1985 年移築して、2004 年 2 月に登録有形文化財登録）にも足を運び、自然光の昼間と人工光の夜間の雰囲気を心に刻んできました。構造は、「レンガ型枠鉄筋コンクリート造で、複雑な架構に鉄筋コンクリートの造形性が生かされた作品である。移築に当たっては、風化の著しい大谷石に代えてプレキャストコンクリートなどの新建材も使った。」と記述があります。

■帝国ホテル中央玄関 昼間　■ライトアップされた夜間の雰囲気

入ってすぐのロビーは、やや天井高さが低いイメージがありますが、その奥には大きな吹き抜け空間があり、より広く空間を見せる工夫がされている。この様相は日本建築にも似ていると感じる。



■吹き抜け空間 1 階、2 階、3 階の様子

ホールの雰囲気の印象は、昼間も自然光のみでは明るいという印象ではなく、重厚なイメージを感じ、夜間は照明の灯りの暖かさが、より重厚な空間になっている。上部の写真は、夕刻にホールから玄関入口を写したもので、その雰囲気が良くわかる。

2016 年 8 月には、池袋の住宅街にある『自由学園明日館』（1921 年完成、1997 年 5 月に重要文化財指定、遠藤新も共同設計者）に行って感じたのは、周辺は住宅街ですが、この建物の周囲には、樹木が立ち並び、芝生に覆われて、静寂な建築がここにあり、心が和む雰囲気がある。この建物は、「木造で漆喰塗、中央棟を中心に、左右に伸びた東教室棟、西教室棟を厳密なシンメトリーに配しており、建築高さを抑えた、地を這うような佇まいを特徴」と資料に書かれていましたが、隣接する道路から眺めるだけで、心地よさが伝わってくる。確かに近くで見ると木造ですが、木造でも日本建築のイメージとは大いに違ったデザインと感じている。そして、随所に大谷石も多く使用されていることも重厚さを演出しているのではと感じる。

■入口　■外観　■通路

建物の窓にも特徴がある。いずれの窓からも採光に注目すると、光を取り入れる工夫と自然光が窓から差し込む光を傾斜天井などに反射して室内を明るくする工夫が多くみられる。ドアや窓が天井面まで取り入れていて、透明ガラスを採用しているのは、このためではないかと思います。

■各窓や採光

私の見た数少ないライト設計の 4 つの建築（グッゲンハイム美術館・ヨドコウ迎賓館・帝国ホテル中央玄関・自由学園明日館）を見て感じたのは、『設計とは機能の集合体』なのではと感じている。建築には光が必ず必要です。それは自然光と人工光の両方である。
大切に考えたい。

「エピソード編」（1）

山田竹材　山田　清昭

家業である竹材業に従事して 35 年になるが、その間体験してきたエピソードを紹介していこう。今回は、私の父「山田敬」のお話し。

商品や原料となる竹材を仕入れに 4 トントラックで竹林へと積み込みに行くのだが、最盛期は毎日のようにトラックを走らせた。

父は私が家業に就いた頃、50 歳を過ぎた頃はまだまだ働き盛りだったが、思い違いや失敗をする度に「ボケてしもうた ...」と口ぐせのように言って責任逃れをしていた。(晩年にはかなり痴呆が進んでいたので予兆があったのかもしれない。）一番困ったのは、商売相手とやり取りの中で、言った！言わない！の論争だった。大概は父が押し通して相手が折れてしまったようだ。

そんなある日、積み荷を終えて満載のトラックを父が運転し、私が助手席に座って帰路 5 分ほど走行したところで「腕時計がない!」と父が言うので、私は車内の足元やシートの隙間を隅々探すが見当たらない。積み場でなくしたのかもしれないので、面倒だが積み荷満載のトラックを現場まで引き返すことにした。

作業をした場所や車の座席を乗降した所など探し廻ったが、みつからないので父もあきらめて仕方なく再度帰路とした。

数 km 走行したとき「時計あったぞ!」と父は歓喜の声、私は「よかったなー!」そして問題の「どこにあった ??」と訊くと、父は誇らしげに「腕にしとった!」私はズッコケてしまった。一体今までの時間は何だったのか ...。

そんな腕時計紛失騒動だったが、忘れた頃にもう一度まき起こったのだが、私は同じ轍は踏まなかった。

父は無類の強健人で、不死身を思わせるほどケガや痛みに強かった。中でも、竹伐採中にチェーンソーでのケガはすごかった。誤って膝に刃をもっていき、皮膚をえぐるケガをしたのだが、その辺に生えていたヨモギの葉を揉んで傷口に当てて布切れで縛り止血し、何事もなかったように作業を続けた。結局病院へは行かず、膝には大きな傷跡が残っていた。

足の骨折が二度あった。晩年には丸鋸で指を一本落としたが、どれも苦痛を訴えることは一度もなかった。普通の人からみれば、単なる無神経者か鈍感な人だったのかもしれないが、決して弱音を吐かないところはド根性のある人だったと思う。

毒ヘビの話しもしておこう。竹林にも時々マムシに遭遇することがあり、父は滋養強壮に好んでマムシ焼酎を飲んでいた。一升瓶を常にトラックに備えていて、現場でマムシを発見するとその瓶に生け捕りして持ち帰っていた。

ある日、持ち帰ったマムシが作業場横の竹材置場に逃げ込んでしまい大騒動！生活道路に面し、近所には民家が多く、人にかみ付きでもしたら大惨事である。積み上げている竹の束を一束一束恐る恐る寄せて捜索をするとマムシは一番奥隅に潜んでいた。

この珍騒動に 2 時間も労力を費やし、家族、従業員から大ひんしゅくを買った。父にとっては非常に高級高価なマムシ焼酎となったことであろう。（父の死後、残されたマムシ焼酎は家族に嗜む者が居らず、全て廃棄された。）

そんな豪放磊落な父だったが、生来胃腸が弱く生涯 5 度の胃潰瘍入院は、不死身な神経、骨格とは裏腹だった。

秋の紅葉と実のこと

松山支部　安藤　雅人

旧イタリア大使館別荘

花のネタが切れたからではないですが、今回は、葉、特に紅葉のことと、実について語ります。

建築と紅葉の関わりは深く、京都の社寺等、紅葉の名所旧跡が沢山ありますが、その中で、私が最も好きな建築は、伝統建築ではなく、日本のモダニズムに大きく貢献した、アントニン・レーモンドによる設計で、中禅寺湖畔に佇む旧イタリア大使館別荘です。

建築士会全国大会栃木大会の時に、どうしても行きたくて、当時の青年委員会のメンバーで、紅葉のベストシーズンに、日光いろは坂をドライブして向かいました。想像を超える大渋滞に遭い、内部を観覧できる時刻を過ぎてしまい、外観だけですが、紅葉の森の中、モダニズムらしい水平基調の形、木の柔らかい質感、中禅寺湖の青い水面が映ったガラス窓がとても美しくて感動的でした。また、建物の中から見えるであろう、絵を描いている私の背中側の、中禅寺湖と男体山の眺めも最高でした。

建築とは離れますが、愛媛の森の紅葉も美しいです。小田深山も良いですが、石鎚山も美しいです。今年は、成就の森に紅葉狩りに行きましたが、この辺りでは、イロハモミジよりも、ウリハダカエデ（瓜肌楓）が主役で、大きくて素朴な感じの葉が、橙から赤まで、色とりどりに変化します。また、シロモジ（白文字）の薄くて柔らかい黄色い葉が、硬くて厚みのある紅いウリハダカエデの葉と対照的で、とても美しいと思い、絵にまとめてみました。樹種を理解すると、紅葉がより楽しくなります。

また、葉だけでなく、実にも美しくて面白いものがあります。鮮やかな赤い大きな実を付けるサンキラ（別名サルトリイバラ、関西の柏餅は、この葉を使用）や、熟

ウリハダカエデとシロモジの紅葉

して来るとピンク色の殻が割れて、中からビヨーンと赤い実が４つ飛び出してきてぶら下がるマユミ（檀）、生け花によく使われる鮮やかな紫色の実を付けるムラサキシキブ（紫式部）等、美しくて楽しい草木が沢山あります。

それらの中で、絵の題材として最も魅力的なのは、ザクロ（柘榴）でしょう。堅くて無骨な殻と、割った時に現れる、赤くて透き通った、まるで宝石のような実が何とも言えずに美しいです。多くの画家達が、静物画の題材に好み、陶器やガラスの器と並べて描いているように、私も、ザクロの実の絵を描いてみました。中の実の透き通った感じを出すのがとても難しかったですが、マスキングによる白抜きや、薄い色の重ね塗りといった手法によって、表現しています。

今回は、紅葉等の色をテーマにしたために、分かり難かったと思います。もし、気になる方は、お手数ですが、愛媛県建築士会のウェブサイトに掲載しているカラー版の PDF ファイルの原稿を観ていただけると幸いです。

ザクロの実

遊び

松山支部　玉乃井　公和

「四十五十は鼻たれ小僧」と、誰が言ったのかは知りませんが、この建築設計の業界ではそんなことが言われています。ある程度年を取ってみれば、その感覚は分かってくるようにも思えますが、私がその“小僧”でさえもなかった二十代の頃、よく先輩たちに言われた言葉があります。
曰く、「他人様の大事なお金を使って“遊ぶ”な」と。
こうした言葉は、たぶん私達の世代で設計に携わっている人であれば、一度くらいは聞かされたことがあるのではないかと思います。

これは私に限った話ではないと思うのですが、若い頃にはどうしても建築雑誌に出ているような、「カッコイイものをつくりたい」といった、外観の“デザイン”に囚われる傾向があります。
先の先輩たちの「遊ぶな」という言葉は、若気の至りで施主に無駄なお金を使わせてはいけない、という戒めの言葉であったかと思います。
そのことは、もちろん今でも戒めなければならないことですが、人は本能として、「遊ぶ」生き物である、ということも又事実としてあると思います。

建築とは関係ないかも知れませんが、例えば“遊び”のないハンドルの車を運転するのは、どうも肩が凝りそうで、また運転そのものも難しそうに思えます。“遊び”があるからこそ楽に、長時間にわたって運転ができるのではないかと思うのです。

これと同じようなことが、建築にも言えるのではないかと思います。建築の中でも特に人とのかかわりが一番濃い住まいを例にして考えてみれば、「遊び」のない、必要な機能しか持たない住まいというのは、イメージしてみただけでも窮屈そうで、そこには生活の潤いやゆとりが感じられません。

要は設計における「遊び」には、“遊んではいけないもの”と、“遊ぶべきもの”とがあるのだろうと思います。
それを独善的に、大雑把に二種類に分けて言えば、一つには設計者自身が「自分はこんなカッコいい“デザイン”をした」、ということを他人に見せたいという“下心”のある、言わば設計者の「エゴ的」な、遊んではいけない「アソビ」と、
もう一つには、そこで住まう人々の心に「安らぎ」や「静かなる感動」などをもたらすための、言わば「利他的」な、暮らしに豊かさをもたらすためのゆとりとしての、遊ぶべき「あそび」があるのではないかと思います。

この後者の「あそび」は、その予算等の許す限りは大いに遊ぶべきであろうと思います。
そして、その“遊び方”を試行錯誤しながら、より高度な、お金のかからない「あそび」として、自分で編み出してみるのも面白いかも知れません。もちろん、それは施主のために。

エゴ的な「アソビ」は、出来上がった時はカッコよく見えるかも知れませんが、時が経てばすぐに色褪せてくるのに対して、利他的な「あそび」は、いつまでも長く人の心に安らぎなどの、心地好さを与え続けることができます。
なぜならば、その利他的な「あそび」の中には、時を経ても変わることのない、本質的なものが表現されてあるのだろうから。

「遊」：〈遊 . 游はともに「あそぶ」の意味に用いる。あそぶというのは、もと神霊があそぶこと、神が自由に行動するという意味であったが、のち人が興におもむくままに行動して楽しむという意味に用いられるようになった。〉
（常用字解　白川　静　著）

住まいの設計をする際には、設計者は少しだけ意識を変えて、興のおもむくままに利他的な「あそび」を、施主と共に真剣に楽しんでみましょう。

第59回 建築士会全国大会「大分大会」各支部報告

西条支部　越智　忠美

今年の建築士会全国大会は、大分県別府市内において開催された。この大分大会に西条支部は、10月21日～23日の３日間、研修旅行を兼ねて14名で参加しました。

出発日は天候に恵まれ、三崎港からフェリーで九州へGO 海も穏やかで何とか船酔いもなく快適な船旅となりました。大分に到着後、早速昼食に佐賀関にある活魚料理処で真っ青な海を眺めながらゆっくりと新鮮な海の幸（全国ブランドの関サバ関アジ御膳）を堪能しました。もうすでに旅行の目的は達成した感がありますね。（笑）お腹が膨れたところで、大分市内にある有名な建築物を巡る研修に出発です。最初に訪ねたのは大分市アートプラザ内、常設の磯崎新建築展示室です。ここに磯崎氏が手がけた建築作品の模型や資料が展示されており、今回の展示では初期に手がけた〈新宿計画〉〈都市計画〉をはじめとする都市プロジェクトなど、都市に向けられた磯崎氏のラディカルな視線の足跡を紹介するとともに、美術館・博物館の設計に見る磯崎新氏の建築手法やコンセプトを垣間見ることができました。大分には磯崎新氏の設計の作品が数多く点在しています。

続いてバスは、アートプラザを後にして実在する初期の代表作「岩田学園キャンパス校舎」の視察へと向かった。この建物の外観は斬新でため息の出る美しさで見事の一言に尽きる。

明日の大会会場となっている別府国際コンベンションセンターも磯崎氏が設計を手がけた建物なので、期待でワクワクしながらホテルで早々に眠りにつきました。

大会当日は、あいにくの雨模様となりましたが、午前中は、別府市竹細工伝統産業会館へGO　館内にはエジソンが発明した竹フェラメントの白熱電球や斬新な竹細工のインテリア製品が多数展示されており、大分の歴史文化に直に触れることができた。竹細工に興味のある方は是非どうぞ。午後からは、全国から3,700名余りの建築士の仲間が集った大分大会に参加しました。オープニングの日本文理大学のチアリーディング部の華麗な演技は目を見はる物があった。―Wonderful―

大分大会は無事終了、宿泊地の大分市に戻りお待ちかねの懇親会、地元の美味しいお肉と適度のアンコールで疲れをとり都町での最後の夜を満喫しました。翌日は、国東半島のつけ根にある宇佐神宮へGO 。全国４万社の八幡社の総本宮＝もちろん広大である＝

うっかりと神社のつもりで歩き始めると、駐車場から本殿にたどり着くころには息があがってしまった。

忙しい日常を離れて、ゆったりとした心持で美しい朱塗りの社殿を眺めると心がなぜか落ち着いた。

さて、バスは南下を続け、途中大分自動車道の別府サービスエリアに立ち寄る。ここから別府湾が一望できる。眼下に広がる温泉街の巨大さに驚いてしまった。

歴史あり、温泉あり、名物料理あり、大分には人を癒すいろいろが実に豊富にそろっていて、今回の大分大会は楽しい研修旅行だったと思います。次回は、ゆっくりと温泉につかりに訪れてみたいですね。

このたび、大分大会に参加下さった会員の皆様には、大変お世話になり有難うございました。

今治支部　森　　昇平

全国大会への参加は、随分前の徳島大会以来で二度目となりました。徳島大会の時は今治支部から結構大勢が参加し、改修前の「戦没学徒記念館」などの見学を含む、バス仕立てのツアー感満載の参加だったと思います。今回はというと少数精鋭による、自家用車とレンタカーを使った手作り企画で、大会のエクスカーションを利用しないで、「見たいものを見に行く」ごく日常的な建築ツアーとしての参加となりました。初日は、マイカーにて朝７時に今治を出発、八幡浜からフェリーで別府に渡り、

大会会場には寄らずレンタカーで中津市へ移動、槇文彦氏設計の「風の丘葬祭場」と「中津市小幡記念図書館」を見学し、大分市のホテルへの旅程でした。「風の丘葬祭場」は壮大なすり鉢状の公園内に埋没する様に置かれた建物で、公園側から見ると斎場棟は傾き、待合棟の外壁の一端は地に埋まり、今にも呑込まれるかの様で（本当ですよ！写真が取れてなくて残念）、外壁の素材感、色合いともあいまって、ランドスケープとの調和が素晴らしかったです。建物内も素晴らしく見どころ満載で、特に階段踊場の扱いは新鮮で、車寄せキャノピーに後付けされた軒樋は気になりましたが、満腹感いっぱいでした。「中津市立小幡記念図書館」は、内部動線が外観に表現され、エッジを効かせたディテールもよかったのですが、エントランスをふさぐように張り出した屋外階段には疑問を感じ、少し消化不良でした。

大分市内に移動した２日目は、徒歩で可能な磯崎新氏のアートプラザと坂茂氏の大分県立美術館を見学し、別府のビーコンプラザへの移動、大会への参加でした。

「アートプラザ」では、今でも褪せない大胆なデザインに「なぜ、どこから？」と驚きつつ磯崎新建築展示室を急ぎ足で見学しました。「大分県立美術館」では、美術館と一緒にデザインされた「かっこいい歩道橋？違うかも！」に目を奪われ、アトリウムは無料で入れ、通常のショップの様でした。

歩道橋で繋がり対面する総合文化センターもガラスカーテンウォールが使われ、統一感があり良かったです。もっとじっくり見たかったのですが、こちらも時間の関係で駆け足見学となり急ぎ大分駅北口へ移動、駅前で駅舎とデザイン調整したと思われる交番を見かけ、大分の建築への意識の高さを感じました。地元の新しい施設付近で、あまりに不調和な施設をみかけ残念に思っていたからか、印象的でした。出来の悪い建築探訪記の様になってしまいましたが、大会イベントでは、日本文理大のチアリーディングが、とっても良かったです。

この後、少数精鋭の意見の一致もありその日の内に帰り着こうと一便早いフェリーで帰路につきました。

松山支部　支部長　赤根　良忠

建築士会第 59 回全国大会大分大会に 10 月 21 日から２泊３日の行程で松山支部総勢 29 名で参加しました。別府市中心部「ビーコンプラザ」にて開催され今年は支部単位での参加となりました。松山支部でも６月頃から計画を立てバスで松山から三崎港を経て佐賀関港に渡り九州へ上陸、まず、日本三大八幡宮の一つといわれる宇佐八幡神社に参拝、ここでは二拝（礼）四拍一拝の作法にて、礼拝の後本殿に入りお払いを受けている最中に鳥取県での地震が発生し、鎮座している本殿でも揺れて少し慌てましたが、大事に至らずよかったと思います。大会当日は一日中雨でしたが午前中から午後にかけてイベントが全てビーコンプラザ建物内で開催され天候の影響はあまりありませんでした。ヘリテージマネージャー大会、防災まちづくり、歴史まちづくり部会へと各フォーラムに参加しましたが、歴史部会においては、５年前に臼杵のまちづくりを支部として見学した経緯が有り、関心を持っていました。活動報告によるとその後も臼杵のまちづくりが継続され、関係している建築士

会々委員が古い建物を購入してまで歴史のあるまちづくりに参加していることが発表され、地域に根ざした活動がされ関係する地元住民にも理解されていることが分かり感銘しました。大会式典では、支部関係では連合会会長表彰を藤井さん、伝統技能表彰を相原さんが受賞されました。大交流会では他県の皆さんと交流を深め有意義な一日を過ごすことができました。今年はお隣の県での開催で、当士会から 100 名を超える員数で参加しましたが、来年度は京都府で 12 月初旬であり何かと忙しい時期であり早めに予定に組み込み多くの参加者で第 60 回京都大会を盛り上げたいと思います。

大洲支部　支部長　神田　孝一

近年に無く近場の大会であり多くの会員の参加をお願いしましたが 7 名の参加となりました。余りにも近く良く行かれていますので仕方なかったのかもしれません。参加予定の一人は 2 日前に急きょ参加不可となってしまい、参加した 7 名は気心の知れた方々ですから楽しい大会参加となりました。

題を付けるとすれば「古建築と芸術と酒を楽しむ」でしょうか。

小雨の中フェリーを乗り継ぎ別府「うみたまご」で久しぶりの水族館を楽しみ、普段の仕事の緊張感を癒され次の訪問地、安心院葡萄酒園を目指します。ここでは大会参加の成功を祈念して葡萄酒で乾杯！昼食を終え大会会場「別府ビーコンプラザ」に入ります。大会次第が滞りなく進行し会場を後にしました。ホテルへ到着後食事までのんびり過ごしました。或る方は別府のシンボル的温泉竹瓦温泉を訪問。古い建築で道後温泉に負けない構えです。さらに入浴料 100 円がうれしい。昔は全国で販売されていた SB 食品ホンコン焼きそばを購入。これは全国で大分県、宮城県、北海道の一部とインターネットのみで販売されている B 級グルメです。楽しみな宴会は関アジ懐石でしたが八幡浜の美味しいアジを普段食べていると感激は今一つでした。美味しいお酒を十分に飲み会話も弾み夜は更けてゆきます。

次の日は日田市を目指します。まずは民藝の器の代名詞「小鹿田焼」窯元を訪問。私はぐい飲みと酒器を購入。素朴な味わいで酒が美味くなりそうです。日田、豆田町へとバスを進め日本酒蔵元の駐車場に入る。蔵元ではユニークなおばさんの楽しい話でしたが内容は飛んでしまっています。豆田町は伝建地区に指定され古い街並みが良く残っています。流石 元天領。最後に残った酒といえば焼酎です。いいちこ日田蒸溜所を訪問。試飲を十分に行いお気に入りの焼酎を購入し帰途につきました。

古建築と芸術と酒を楽しむ建築士会全国大会は無事終了し来年の京都大会へ思いを馳せています。

西予支部　支部長　亀岡　俊治

当初は、7 名の参加予定でしたが、諸事情により、4 名の参加となりました。朝 7 時 城川町発・野村町・宇和町経由、9 時半三崎港発 10 時 40 分 佐賀関着で、会場には昼ごろの到着でした。各ブース見学等をして、式典に参加しました。ついでに、「グローバルタワー」という地上 100m の展望デッキにも、上がってみました・・・バカの高上がりですが。

ガラス張りのデッキで“尻の穴”が、かゆかったです。大懇親会には、参加せず、大分市内のホテルまで帰って、４人で、真面目に夕食を取りました。23 日は、湯布院の古い町並みを改造した小店の並ぶ所へ行き、ちょっとお土産も買いました。せっかくなので、“夢”の大吊り橋も見にいきました。あいにく、小雨でしたので、簡易カッパを着ての通行でした。但し、初めての１人のみが、渡りました。川から、170m。長さ 390m の吊り橋は、中々良かったです。

再び、大分市に帰り、「大分美術館」を見学して帰りました。なんとか、４時発のフェリーに間に合い、５時過ぎに、愛媛に無事帰ることができました。

次回は、[京都大会] ということですが、「京都も行きたい」という意見がありました。

宇和島支部　支部長　大内　寛司

久し振りの近県（おんせん県）での全国大会。宇和島支部は、バスで 20 名、先発隊２名の計 22 名の参加となりました。10 月 22 日早朝、宇和島を出発。フェリーの中で大洲支部、伊予支部と遭遇。船内で情報交換！フェリーは揺れることもなく無事九州上陸。

まずは、ブランチ！今回の旅の安全を祈願して〇―〇で乾杯！（笑）関アジ、関サバ、サザエ等地元の海鮮で舌鼓を打ちました。大会式場への途中、坂茂氏設計の大分県立美術館を見学。さすが建築のプロ集団！建物を見ながら、意匠、構造、施工それぞれの立場で、あーだこーだと話題が盛り上がります。建物の設計コンセプトは、街に開かれた縁側としての美術館。アトリウムは人々が自由に道路と行き来できるように全面がガラス水平折戸となっています。ただ、美術館の人の話では、開館して１年半になるけれど、開けたのは３回のみということです。開けるには、様々な気象条件をクリアすることが必要なようです。設計コンセプト通りに使用されないのは、よくあることかもしれないですね～。

いよいよ大会式場、磯崎新氏設計の別府ビーコンプラザに到着。愛媛県建築士会の見慣れた会員としばし談笑。大会式典のオープニングセレモニーでは、全国大会 14 連勝の日本文理大学、チアリーディング部の華麗な演技で式典を盛り上げました。今年の式典では、宇和島支部からは中紘三氏が、連合会長表彰を受賞！おめでとうございました。式典は、例年通りのスムーズな進行で、予定通り午後５時に閉会。今夜の宿泊地、阿蘇へと向かう。２週間前に大噴火があったばかり。途中に通行止めの箇所があったりして、不安はあったが無事ホテルに到着。食事をしながら、支部の親睦を深めました。早朝からの強行な行程だったので、ゆったりと温泉に浸かって、いい子で翌日に備えました（笑）

翌 23 日、半年前の熊本大地震で土砂災害があった阿蘇の山並みを遠くに見ながら、震災にあった熊本城へ向かいました。当時、応急危険度判定士として活動して頂いた会員からは半年前と全然変わっていないとのこと。雨ざらしの熊本城を見て寂しくかわいそうに感じられました。想定外の非常事態、臨機応変に対応できないものですかね～？熊本市から益城町に向かう。震度７が計測された町です。倒壊したままの家屋がまだまだ多く見られました。これが耐震先進国の現実なのでしょうか？身の引き締まる想いがしました。

最後に竹田市の岡城址。やっと雨があがって記念撮影。ここは「荒城の月」の作曲者の滝廉太郎が曲のイメージを得た場所です。明治維新後の廃城令によって全てが破壊されたそうです。今、まさに山城ブーム。岡山県の備中松山城では、荒廃していた建物が一人の中学校教諭の調査記録によって修復の機運が高まり修復されたそうだ。やはり建物の運命は、一人の人によって大きく左右されることを痛感しました。

帰りのフェリーは大時化の中、何人か船酔いをしたも

のの最初の〇―〇での安全祈願のおかげで（笑）無事、宇和島に到着しました。

今回の支部旅行では、色々と心で考えさせられたことが、たくさんありました。参加して頂いた会員も、きっとそれぞれの立場でこれからの実務に今回の体験を生かして頂けるものと思います。２日間、大変お世話になりました。ありがとうございました。

第７回建築士フォーラム in 大分

今治支部　青陽　孝昭

愛媛から松平青年委員長と青陽が参加
（全国で 220 名申込 当日 298 名参加）

はじめに全国建築士フォーラムとは、

建築士会全国大会前日に全国の青年建築士が集まってざっくばらんに意見交換の場として平成 21 年やまがた大会前日に「全国青年建築士フォーラム」として開催され翌年佐賀大会より「全国建築士フォーラム in 佐賀」と改名され in どこそことなったそうです。僕は第３回に行われた茨城がデビュー以前にも何かの時に書いたと思うのですが、茨城では、このフォーラムが地域実践活動報告会でした。昨年も同様でしたが、今回は、地域実践活動報告会は本大会のスケジュールとなり、フォーラムでは、平成 26 年度全国青年委員長会議で議論した『魅力ある未来へ』～行動しなければ何も変わらない～」に対する各目標に対する成果と各ブロック会青年建築士協議会の報告会と言う事で、会議に出席したく、あの時の議論が全国でどの様に展開されたか聞きたくて参加しました。

【第一部】「H26 年度全国青年委員長会議で掲げた成果発表・報告会」
北海道ブロックより北から南九州ブロックの順に発表があり、北海道 B+ 東北 B の発表はブロック内の県で共通させたイベントなどを開催し、ブロック内の連携がとれている事に驚きを感じた。他ブロックに関しては単位士会の取組発表に留まり、なんかさみしい気分となった。ちなみに北海道ブロックでは目標を 次世代の子ども達に建築の魅力を伝え、次世代へつなぐ〈具体てきには･?〉お仕事体験イベントをバージョンアップさせる（体験イベントは年に一度一箇所で行われていたらしい）四国で言う愛媛・香川・徳島・高知を道南：函館・道北：名寄、宗谷・道東：北見・道央：江別の四つの地区割をされている。一つイベントを四か所で実施し課題や方法など共有され北海道内の仲間づくりにも繋がったなどの話であった。

【第二部】「災害時、私たち建築士にできること」
熊本地震現状報告　熊本士会：甲斐さんより
正直、熊本県の建築士悲しいが、震災の準備が今まで出来てなかった事を悔やむ話をされ、多くの他府県に助けられた・・などのお話
その後、パネルディスカッションに移り、東日本大震災：福島士会：工藤さん・阪神淡路大震災：兵庫士会：工藤さん・熊本地震現状：熊本士会：甲斐さんコーデイネーター：安田連合会青年委員長が話をされました。
その後、テーブルディスカション
「テーマ１：あなたが今まで経験した災害。その状況や被害について。」
「テーマ２：災害時、困ったこと。必要と感じたこと。」
「テーマ３ ： 私たち建築士に出来ること。」
テーマ１：２で話し合った被害の状況や困ったことなどを振り返り、地域の一住民として、また建築士としてなにができるかを、自助：共助の二つを（災害前・準備）（災害発生時・発生直後）（復旧・復興期）と分け協議しまた、各テーブル代表７名が発表し総評。四時間あっという間のひとときでした。

第4回講座（9月24日）

場所：常信寺・持田地区
講師：文化財・まちづくり委員会 委員長　花岡　直樹

「松平定行の霊廟の保存修復工事の概要・定政の霊廟の土塀改修見学と持田地区の文化財の見学」

報告：文化財・まちづくり委員会委員長　花岡　直樹

午前中、再び常信寺の庫裏をお借りして、平成23年度から25年度にかけて行われた愛媛県指定記念物（史跡）である「松平定行の霊廟」保存修理工事の過程を紹介・説明しました。その後、現在行われている定行公の弟「松平定政の霊廟」の土塀の保存修理工事の様子を見学しました。

午後は松山市持田地区の文化財を巡りました。講師は愛媛県建築士会を代表して、文化財・まちづくり委員会委員長の花岡が務めました。講座の内容は以下の通りです。

＜午前の部＞

常信寺庫裏での説明の様子

常信寺の紹介

・常信寺の位置と歴史
・常信寺の霊廟建築について

「松平定行の霊廟」の内容紹介

・建物の概要
・これまでの修理工事について
・建物の修理前の状況及び破損状況

保存修理工事の内容の紹介

（1）仮設工事：進入路の整備や屋根工事を行うための「素屋根」を架ける必要があるため、一般の建築に比べて仮設工事の比率が大きくなりがちである。
（2）本殿屋根修理工事：桧皮葺きから瓦に葺き替えた時の脆弱部分を今回補強し、全体強度を増すために桔木の数を増やし補強した。正面と背面の唐破風部分は袖丸瓦を使って修理前より高く納め、念のために銅板の樋を下地の上に設けた。
（3）唐門屋根修理工事：規模が小さくても工事内容は同じである旨を説明。
（4）仕切り塀修理工事：土台まで白蟻の被害を受けている部分は解体修理を行った。白蟻の威力に圧倒された。
（5）拝殿修理工事：床組を中心に改修。移動式の祭壇も修理した。また、南北面の格子戸のうち、それぞれ両端に厚板を打ち付け耐震補強を行った。
（6）飾り金物修理工事：本殿本体と、本殿・拝殿・唐門の扉には一部建築当初の唐草模様と久松家の梅鉢の家紋が描かれた真鍮の飾り金物が残っていた。これらは磨いて真鍮メッキして取り付けた。欠損していた部分には模様なしの真鍮板を取り付けた。拝殿には復元考証を行って鉄製の金物を取り付けた。

飾り金物の説明の様子

（7）土塀修理工事：壁の漆喰を剥ぎ取り、傷みが激しかったところは土塗り部分も補修した上で、仕上げ漆喰塗りを行った。屋根瓦は、今後壁が水に濡れることを減らすため長いもので葺いて、壁からの出を≒150mmとした。
（8）その他：それぞれの年度の工事が完了したときに真鍮製の修理記録の札を取り付けた。

定行の霊廟を見学

修理工事の内容を理解した上で、7月23日の講座に続いて2度目の霊廟の見学を行った。修理部分を中心に説明を行った。

工事中の定政の霊廟の見学

土塀の保存修理工事中の「定政の霊廟」土塀の壁はちょうど下塗りの斑直しの最中で、塗り方、古土と新しい土の混ぜ合わせの様子、土に混ぜる藁すさの切断の様子を見学した。

＜午後の部＞

午後は持田地区に場所を移して建物の見学を行った。この地区は第2次世界大戦の空中の被害をかろうじて逃れ、多くの文化財建造物が残されている。

古土と新しい土の混ぜ合わせの様子を見学

定政公の霊廟

（1）持田幼稚園：昭和42年

・松村正恒氏の設計（八幡浜市で重要文化財に指定された日土小学校の設計者）。

・規模こそ違うが、日土小学校と同じ設計理念（採光、通風等）を垣間見ることができる。

（2）八束家：昭和11年 ＜登録有形文化財＞

・この地区に残る昭和初期の上流階級の住宅のひとつ。一室洋館・二つの玄関を持つ。

・本格的な茶室を備え、別棟の待合を持つ。

（3）旧制松山高等学校（現愛媛大学付属中学校）講堂：大正11年 ＜登録有形文化財＞

・壁はドイツ下見板張り、玄関ポーチは8本の円柱（トスカナ式）で支えられている。

講堂内部での説明の様子

・昭和25年（1950）に新制愛媛大学理学部、昭和38年（1963）に付属中学校の講堂になる。現在も現役で、入学式、卒業式、音楽会などの学校行事に使われている。

（4）奥平家　母屋：昭和8年（1933）、離れ：昭和15年

・この地区に残る昭和初期の上流階級の住宅のひとつで一室洋館を持つ。大正ロマンの表れ。

・南側の庭の東に離れが建つ。ここより庭越しに松山城が見える。

（5）松山地方気象台：昭和3年（1928）　＜登録有形文化財＞

・玄関の腰のタイル、観測室の小屋のトラスの鉄骨が萬翠荘のものと同じ。

・設計者の戸村秀雄（県の技師）が、何らかの形で萬翠荘の仕事に携わった可能性が大きい。

（6）日本聖公会松山聖アンデレ教会：昭和31年（1956）

・松山市に現存する唯一のレンガ造の教会である。

・平成13年の芸予地震後、耐震改修された。

（7）愛媛県教育会館：昭和12年（1937）　＜登録有形文化財＞

・設計は愛媛県技師 浅香了輔。

・昭和8年、愛媛県教育会総会で、教職員研修の場を目的とし満場一致で可決。

・縦長の上げ下げ窓など洋風意匠を基調に、和風装飾も持つ帝冠様式である。

・当時県内の教職員が、給料の千分の一を5年にわたって分納したとされる。

（8）旧雨宮新七家（古川家）：昭和7年（1932）

・当時の松山中学の校長の雨宮新七氏の居宅。

・玄関・応接間は斬新なデザインの洋室。

なおこちらでは、第3回の三浦先生の講義を思い出しながら、この住宅の優れた点、特筆すべき材料なども皆で探し検討を行った。また残された図面や古写真と建物を比較して、当初のままのところと改造されているところなどの考察を行った。

資料と建物を比較・考察の様子

第5回講座（10月8日）

場所：内子自治センター・内子町並
講師：文化財・まちづくり委員会委員長　花岡　直樹

「文化財の保存・活用の実例紹介と町並み内の建物見学」

報告：文化財・まちづくり委員会委員長　花岡　直樹

今回は内子町に場所を移し、重要伝統的建造物群保存地区（国指定の文化財）と、町並み内にある主要な建物の見学を行いました。その前に内子自治センターにおいて３軒の芳我家を例にとって、保存と活用について比較して解説をしました。

今回も文化財・まちづくり委員会委員長の花岡が務めました。講座の内容は以下の通りです。

＜午前の部＞

３軒の芳我家について

本芳我家、上芳我家、下芳我家等、○芳我という建物があるが、姓はすべて「芳我」。本家の本芳我よりの分家を、それぞれの位置や方角などでの呼び名である。

内子自治センターでの講義の様子

（1）本芳我家（国指定重要文化財）

・主屋（明治22年）、炊事場、産部屋・便所及び湯殿、土蔵（明治33年）の4棟
・残されているのは居宅部分で、道を挟んだ東側の作業場、蝋の晒し場は廃業後売却
・平成15～18年度にかけて保存修理工事が行われた。
・修理後、所有者の芳我大輔氏ご夫妻が居住していた。

＜現役＞

・食事の間を居住用に改造→洗面所、浴室（ユニットバス）、便所（洋風便器）、台所（システムキッチン）を備えた近代的な部屋。文化財改修の新しい手法として注目されている。

（2）上芳我家（国指定重要文化財）

・主屋（明治27年）、炊事場、離れ座敷、離れ部屋、釜場、出店倉、土蔵など10棟
・文久元年（1861）、本芳我より家督と金、晒し場の3割を与えられ分家
・現在は内子町の管理で木蝋資料館として一般公開されている（有料）。＜見学＞
・平成20～23年度にかけて保存修理工事が行われた。

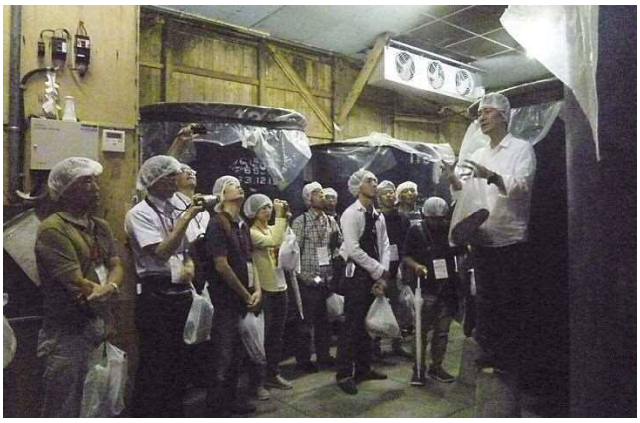
（3）下芳我家（国の登録有形文化財）

・主屋（明治27年）、隠居屋が平成19年3月、登録された。
・JR四国がレストラン（日本そば）として営業している。**＜別用途＞**
・主屋2階の「芳我の間」、「大黒の間」はギャラリーとして公開されている。

町並と建物の見学

（1）酒六酒造

・5つの蔵元が合併して、大正9年11月に誕生した酒造会社を前身とし、昭和16年に酒六酒造株式会社となった。
・大規模な工場を連結し、少ない柱で広い空間を確保している。このため現在では柱の傾斜も見られ、一部外部から鉄骨で支える補強を施している。
・土壁の崩落や、屋根のひずみにより雨漏りしているところもある。
・とにかくレンガ造の煙突も含めて、これだけ大規模な建物の維持は大変である。



酒蔵の中で武知社長の苦労話を聞く

（2）内子座（国指定重要文化財）

・大正5年（1916）に大正天皇の即位を祝い、内子町の有志によって建設された。
・昭和57年（1982）、内子町指定有形文化財に指定。その後、同58～60年にかけて往時の姿に復元する工事が実施された。
・平成27年に国の重要文化財に指定された。
・県下で唯一伝統的芝居小屋の形式を今に伝えている。この日は当日行われるイベントのリハーサルが行われていたため、外観のみの見学となった。

＜午前の部＞

午後は伝建群の中にある３件の重要文化財を訪ねた。それぞれどの時代に復元するか、実際に生活する上での工夫、構造補強の方法などについて熱心に見学した。

大村家（手前）と本芳我家の見学の様子

（１）大村家住宅：主屋は寛政年間（1789～1801）

・3軒の重要文化財の中で一番古い時代のものである。
・他、裏座敷（明治18年）、木小屋（慶応2年）が、当時の姿を残している。
・平成21～24年度にかけて保存修理工事が行われた。
・耐震補強工事、防災設備工事も同時に行われた。

土間に設置された易操作性消火栓

（2）本芳我家住宅：主屋は明治17年（1884）

・建築当初に復元するのではなく、芳我家がもっとも繁栄し、北の庭を増設して庭用の玄関を作った昭和初期の姿に復元された。

（以下、午前の部を参照）

（3）上芳我家住宅：明治27年（1894）

・構造補強を中心に見学。主屋は鉄骨補強の他、床に鉄板を用いて水平構面を設けている。
・土蔵も鉄骨を井桁に組んだ補強を行っている。
・防災面では、主要な部分に炎感知器を設置して、外部の火災の早期発見に努めている。
・主要な部屋の火災報知機の感知器はスポット式ではなく、目立たないように空気管を張り廻らしている。

本芳我家の主屋（手前）と土蔵の見学の様子

上芳我家の中庭での見学の様子

土蔵内の井桁に組まれた補強の鉄骨

第6回講座（11月5日）

場所：末光家住宅・宇和町町並み・開明学校他
講師：愛媛県建築士会副会長　酒井　純孝

報告：文化財・まちづくり委員会委員長　花岡　直樹

「末光家の調査・修復工事の説明と宇和町中町の町並み・旧武蔵の見学」

今回は西予市宇和町での開催でした。午前中は西予市指定文化財の末光家住宅をお借りして行われました。最初に、本講座の最終回で発表する「私が見つけた文化財」について、委員長の花岡から班分け案を提示し、今後の課題の登録や提出の日程等について説明を行ないました。続いてこの建物の調査・修復工事の説明が行われました。

午後は末光家住宅をじっくり見学した後中町の町並に繰りだし、重要伝統的建造物群保存地区（国指定の文化財）内にある建物を見学して回りました。

今回の講師は（公社）愛媛県建築士会副会長で文化財・まちづくり委員会の委員でもある酒井純孝氏にお願いしました。講座の内容は以下の通りです。

＜午前の部＞末光家住宅について

調査・保存修理工事に至った経緯

・平成14年5月、当時第17代御当主の末光大輔氏より愛媛県建築士会に、本建物の図面作成、現況調査、建築的価値の特定、保存修理工事指針の策定などの業務について依頼があった。
・文化財委員会（現文化財・まちづくり委員会）犬伏委員長を中心に、委員会のメンバーでチームを組んで作業を進め、平成16年6月に保存修理工事が竣工した。

末光家・建物の歴史について

・末光家は宝永6年（1709）にこの地に移住し、「清澤屋」の屋号で酒造業を営んでいたが、享保元年（1716）の大火で旧家屋は焼失した。
・現在の主屋は明和7年（1770）に末光三郎右衛門保宜が建てたもの。
・その後大正初期まで酒造業を営み、同8年（1919）「卯之町醤油会社」設立。昭和12年（1937）まで営業。
・第16代御当主・千代太郎氏は伊予銀行初代頭取。
・調査・修復工事時の御当主の大輔氏は平成22年1月に死去、第18代の敏行氏により、西予市に寄贈された。
・建物は創建以来改築、改修を繰り返してきた。特に仏間・板間廻り、台所廻りは何度も改修された。
・土間廻りは戦後住宅（借家）として利用していたため、間仕切・床上げされ、5部屋の居室が南北に並んでいた。
・2階は当初は収納として使われていた。明治28年（1895）以降に間仕切り天井が張られ、居室として使われた。

修復工事について

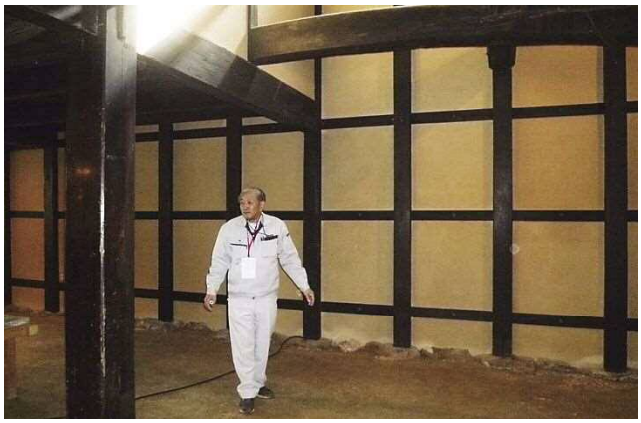
・修復は末光家がもっとも繁栄したとされ、金庫を購入し2階を居室化した明治28年以降の形に戻すこととした。
・調査・修復工事は、（公財）文化財建造物保存技術協会の技術指導を受けながら行った。
（以下詳細は省略）

末光家での講義の様子

＜午後の部＞建物見学

（1）末光家

・土間の復元の様子、土間の柱の根継ぎの跡、仏間・板間の改造を物語る廻縁、1階と2階を仕切る横引き戸の端が木製の蛇腹状（現在のシャッター）になっていることなど、細部を見学。
・襖紙、床の間の壁、2階のガラスなど、当時の特徴を示すものを紹介。
・調査や修復工事の苦労話を披露。


居室を撤去し復元された土間

（2）旧武蔵

・創建は明治末期から大正初期と推測される。
・料亭、魚屋、仕出し屋などの用に供された後、借家として使われていた。
・その後空き家となり老朽化していたが、西予市が購入し修理を行い、小学生に昔の生活体験学習の施設とし

末光家座敷での説明

竈前で法的な苦労話を説明

て整備された。
・平成25年10月～26年10月まで、酒井氏により調査・修理工事の設計が行われ、その後工事に着手し平成27年3月に竣工した。
・耐震補強の金物、土間三和土等の説明を受けながら見学。

旧武蔵の外観

耐震補強用の金物

・竈の再現について法的な苦労話を聞いた。
（3）その他の建物
　その後以下の建物について説明を受けながら見学して回った。
・大門（鳥居門）→高野長英の隠家→岡家（土蔵を蔵玄関に改修）→旧開明学校・申義堂

重要文化財開明学校の見学

申義堂の見学

第7回講座（11月19日）

場所：愛媛県林業会館及び萬翠荘
講師：文化財・まちづくり委員会 委員長　花岡　直樹
近代化遺産活用アドバイザー　岡崎　直司

「洋風建築の保存修理工事と近代化遺産について」

報告：文化財・まちづくり委員会委員長　花岡　直樹

今回は場所を松山の林業会館に戻して、午前中は松山の重要文化財萬翠荘の紹介と保存修理工事の内容をスライドで説明し、そのあと萬翠荘を見学しました。午後は近代化遺産について講義を受けました。

また、「私が見つけた文化財」の班分けを決定しました。

講師は午前中を文化財・まちづくり委員会委員長の花岡が、午後は近代化遺産アドバイザーの岡崎直司氏が務めました。岡崎氏の建築専門の視点から少し角度を変えたとらえ方と、今までとは違った切り口と、ウィットを利かせた洒落を交えた話しぶりに、受講生は熱心に耳を傾けていました。講座の内容は以下の通りです。

＜午前の部＞

洋風建築について

・第1期：維新後、外国人技術者によるもの（釣島灯台）
・第2期：擬洋風建築（おしはかる、なぞらう、まがう）
日本の工匠が外国人の建てた建築物を見聞し、理解し得た洋風の意匠や構造の部分を、古来の技術の上に積み重ね、文明開化を志向した作品（開明学校）
・第3期：本格的な洋風建築→洋式建築
本格的に洋式建築を学んだ日本人によるもの（萬翠荘、愛媛県庁本館）

林業会館での説明の様子

萬翠荘の概要

・松山城が建つ勝山の南の山麓に位置する。近世末まで松山藩家老屋敷として利用。
・前面の一番町通りより約11m高く、建築時には松山の市街地が一望できた。
・大正11年（1922）11月竣工
・鉄筋コンクリート造、地上3階、地下1階、延べ床面積約900㎡（300坪）
・建築費は約30万円、現在の価格に換算すると約19億円→坪単価633万円
・施主は久松定謨（さだこと）。松山藩14代藩主久松定昭の養子、久松家16代当主。
・設計は木子七郎。明治17年生まれ、明治44年東京帝国大学建築学科卒業。妻が松山出身の実業家、新田長次郎の長女ということもあり愛媛での作品が多い。伊予銀行湊町出張所（大正3年）、萬翠荘、愛媛県庁舎（昭和4年）、石崎汽船本社（大正14年）、鍵谷カナ頌公堂（昭和4年）など。愛媛の近代建築に大きな影響を及ぼした。

建築的特徴（省略）

文化財的価値

・昭和60年、県の有形文化財に指定
・平成18年～20年スレート屋根の葺き替え、内装、シャンデリアの修理など、保存修理工事が行われた。
・平成23年、国の重要文化財に指定された。
・日銀松山支店が取り壊された今、県下随一の大正期の洋風建築として貴重

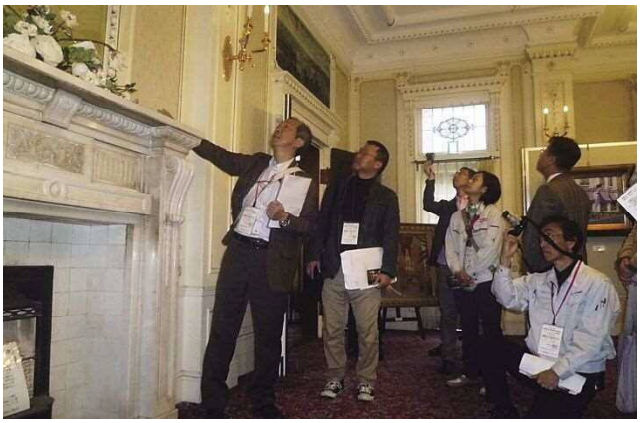
保存修理工事の内容

シャンデリアの修理の様子を紹介

・タイルやモルタルの躯体コンクリートへの固定
・高圧温水洗浄
・建具の修理：締め直し、傷んだ部材の取替え、金具の修理・補足
・照明器具の修理：金属部分の修理、金メッキ、ガラス部分の修理、点灯のための配線替え
・内装の補修、金色塗りはトールペイントの女性職人
・躯体コンクリートの補修
・トラスの鉄骨の錆び止め塗装
・屋根の天然スレートの葺き替え
・銅板の覆いの補修

・屋根上手摺の土台の木骨補修
・銅板屋根の補修
・屋根の飾り（ピナクル・ファイニアル）の修理
・避雷針の整備
・足場の工夫：外壁に穴を開けて控えが取れない。

講義のあと萬翠荘に移動し、上記の工事の確認を中心に、外観・1階・2階の順に建物の見学を行った。普段は非公開の小屋裏も見学した。天然スレートの鱗葺きの屋根を支える鉄骨のトラスを見ることができた。



萬翠荘での見学の様子

＜午後の部＞

近代化遺産の分類・概要

・近代化遺産とは、明治（一部幕末）から昭和前期の間に造られた産業遺産を中心とする歴史遺産を指す。Industrial Heritage

愛媛県での特徴

愛媛県では、平成13・14年度（担当：県民交流課）、同23・24年度（担当：文化財保護課）の2回の調査を実施。視点の違う2回の調査は愛媛県だけである。

・農業系遺産が多い。：農業利水（水路やため池）や米・柑橘などの農業倉庫。
・鉱業系遺産が多い。：地質と関係した銅鉱・石灰を中心とする全国有数の鉱業県。
・産業遺産系：養蚕業及び繊維業関連の遺産。
・トンネル・橋梁が多い。：地形が複雑なことによる鉄道及び道路の立地状況。
・港湾、護岸系土木遺産：地質に関与した青石や花崗岩、砂岩等を使った構造物。
・住宅事例が多い。：急速な都市化を免れ、残存維持されてきた経緯。
・戦時系遺産が多い。：地勢学上の要因（芸豫要塞や豊豫要塞）
・モダニズム建築の多さ。：建築家丹下健三や松村正恒、浦辺鎮太郎ほか

愛媛県の近代化遺産に関する書籍の紹介

・愛媛の近代洋風建築：（財）日本建築学会四国支部・愛媛県文化振興財団
・愛媛温故紀行（財）えひめ地域藤研究センター（1回目）
・愛媛県の近代化遺産（報告書）：（財）えひめ地域政策研究センター（2回目）
・えひめの近代化遺産（普及版）
・まちづくりアーカィブズ…えひめ南予の町並み事情…：岡崎直司

など、書籍の紹介があった。

事例紹介

この後スライドを使って、土木遺産、産業別の遺産、軍事遺産等について説明を受けた。建物の解説だけではなく、歴史や地域事情など面白い話が加わった興味深い説明であった。（内容の詳細は省略）

スライドを使った講義の様子

事例紹介　砥部のみかん倉庫

建築巡礼 in 松山 VIII

松山支部　久保　　孝

日　時：平成28年7月16日
場　所：松山市道後界隈
対象者：一般市民
参加者：一般市民20名、スタッフ25名

活動の内容と成果

松山支部公益事業「建築士の日」行事として今年も建築物を観て解説し巡回する建築巡礼の第8回を7月16日（土）に開催しました。愛媛新聞社による後援とパンフレットに依る公募で、一般参加者20名が集まり、スタッフ25名、総勢45名での開催となりました。

今年は「徒歩で散策しながら道後界隈の建築めぐり」と題して、暑い中ではありましたが、歴史の多く残る道後を中心に青年委員のメンバーによる建物紹介が行われました。

道後商店街入り口のからくり時計に集合し赤根支部長の挨拶の後、早速、放生園にある足湯の湯釜、鷺石のいわれ、柳原極堂・森盲天外の句碑について和田・河窪氏、伊予鉄道道後温泉駅について長岡・白石・大内氏から説明が行われました。足湯の湯釜は本々道後温泉本館の養生湯で使われていた事や、道後温泉駅は明治30年頃、一番町駅舎として建てられ、大正7年に現在の位置に移築されたこと、小屋組にトラスを用いるなど一般の方には少々難しいが建築構造的な説明も行われました。

道後商店街を抜け次の散策地である道後温泉本館では、西森・河野氏による説明で、道後温泉本館を外から見ると一つの建物のように見えますが、実際には四つの建物から出来ていることや、現在、道後温泉本館の顔となっている西面玄関棟は昭和9年に移築された建物で、北面の神の湯棟が本来の正面玄関であり、その証拠に屋根の鷺が北を向いていること、皇族専用の又新殿・霊の湯は今までに10回しか使用されていないこと、南面は大正期独特の漆喰壁とガラスとのたたずまい等、東西南北でそれぞれ違った顔をもつ、松山の観光スポットについて説明が行われました。

次の散策地の宝厳寺までは坂道の為、一般参加者の体調の様子を伺いながらの移動となり、平成25年の本堂の焼失で建て替えられ、桧の香りが新しい本堂、一遍上人堂を長井・峰岡氏が行いました。説明者の峰岡氏は丁度、一遍上人堂の施工にあたられたこともあり、工事中の苦労話等に一般参加者は耳を傾けられていました。次の伊佐爾波神社は宝厳寺から近くですが結構な坂道で午前中最後の難関でしたが、全員無時に到着し、近藤・松平氏により伊佐爾波神社の建てられた経緯、建物の造り、要所にみられる彫刻とその意味をフリップを用いたわかり易い説明が行われました。

午後からは、道後公園内の湯釜薬師・湯築城跡復元の見学で、湯釜薬師は長岡氏、湯築場跡復元（当時の住居）は、現場監督を担当された武内氏の説明で行われました。湯釜薬師は明治27年の道後温泉神の湯の改修まで、一の湯の原泉位置に据えられ湯口として使用されていた。湯釜の宝珠に刻まれた「南無阿弥陀仏」は一遍上人によるものと言われていること、湯築城跡復元（当時の住居）については、当時の材料、大工道具、施工方法を忠実に再現した事等、参加者は説得力のある説明を受ける事ができました。毎年の事ですが、事前に巡礼先の勉強会を行い当日を迎えますが、今年は特に青年委員の皆さんが良く勉強されていて連携がとれていたと感心しました。

松山支部青年・女性委員会主催 勉強会報告

松山支部　青年女性委員会副委員長　大内　雄志

開催日：10月8日（土）16：30～18：00
テーマ：「古民家の魅力と再築基準」
講　師：一般社団法人住まい教育推進協会　川上幸生会長
場　所：愛媛県林業会館 大ホール
参加者数 23名 （懇親会15名）

去る10月8日（土）、H28年度第1回松山支部青年・女性委員会主催の勉強会を開催致しました。記念すべき第1回目の勉強会は、（一社）住まい教育推進協会の川上会長を講師にお招きし「愛媛県の古民家再生のすすめ」と題してご講演頂きました。愛媛県建築士会も今年度よりヘリテージマネージャー養成講座がスタートし、県下の歴史的建造物の保存活用について意識・関心が高まってきていると思い、本テーマでの開催とさせていただきました。

勉強会の内容は、全国各地域に残る日本の住文化である「古民家」を未来へ継承するために、建てては壊す考えを改め、先人たちの知恵・日本の文化や技術を後世へ残していこうではないかという壮大な内容でした。

「古民家」と聞くと、「寒い」「暗い」「耐震性への不安」など悪いイメージを持ってしまいがちですが、川上会長の運営されている本協会では「再築基準」というガイドラインに作成し、その内容に則った改修・改築により、安全で安心できる住宅として後世にその伝統を継承するという活動をされています。再築物件の品質の証明として「古民家再築証明書」、新築住宅で50年後古民家となるような構法資材を用いて建てたものには「新民家認定書」などの証明業務を行い、安心を担保しています。さらに300万円以上の比較的大きなリフォーム工事を行う際は必ずリフォーム瑕疵担保責任保険を付保し不測の事態でもお施主様が困らないよう配慮しているなど、安心という要素を通して「古民家」という概念をもっと身近に感じてもらえるような工夫がされていると改めて感じることのできた勉強会でした。

この度勉強会へご参加していただきました方々、誠にありがとうございました。さらに第2回、第3回と勉強会開催を計画しております。ぜひ引き続きご参加いただきますようお願い致します。

【参加者アンケート（一部抜粋）】

「改めて日本の技術の高さを感じた。実際に古民家を見ながら勉強できればうれしい。」

「古民家鑑定士という資格を初めて知った。古民家の改修は建築士のみの経験に頼るとリスクが高いため、古民家鑑定士という資格の存在は大きいと感じた。

「残すべき古民家の見分け方などのポイントがあれば聞きたい。」

「古民家再生することに対する取り組みがよくわかった。新築・リフォームや古民家再生には木材の利用が期待できると感じた。」

【川上講師からのコメント】

「古民家というものは建築基準法では規定されていないものですが、愛媛県内でもまだ4万棟以上残っています。

三世代同居などは今年長期優良住宅化リフォーム推進事業などで推奨されましたが、現在見直されている多くのことは実は古民家では当たり前のことなのです。

建築士の皆様は、消費者から頼られる建築のプロ。先人の知恵を学びそれを現代の住まいに活かしていただく一助として今回のセミナーが少しでもお役に立てたなら幸いです。ありがとうございました。」

「古民家の魅力と再築基準」勉強会

川上会長との懇親会

建築文化市民講座
細川家住宅改修工事見学会報告

四国中央支部　遠藤　禎誌

平成 28 年 7 月 31 日
四国中央市富郷町津根山寺野 352 番 9
参加人数 32 名

細川家住宅茅葺屋根吹替え工事に当たり、四国中央市教育委員会と建築住宅課のお取計いにより、工事見学会が実施されました。細川家住宅は明治十五年に旅館としての機能ももつように新築された建物であるが、細川家の先祖が土佐より移り住み農業の傍ら旅籠も経営していた。この地は白滝鉱山への要所であるために通行する人々も多かったという事である。昭和六十二年富郷ダム建設にともない、保存民家に選ばれ、同年より三年かけて茅を集積し、平成元年に移築工事が開始されたが平成二年五月に未完成のまま工事が終了していました。今回の工事は茅葺屋根の葺替えと外壁、内部改修工事も行われ、三和土土間も改修されましたが、本見学会はあまり見る機会のない茅葺工事に合わせて行われました。

茅葺工事は美山茅葺株式会社（京都府南丹市美山町）の施工によるもので、大野さん（松山市出身の女性　推定年齢 27 才）が現場責任者として工事が進められておりました。見学会は大野さんの解説により進められ、茅葺道具の説明から行われましたが、冒頭に大野さんより『茅葺屋根の材料は何だと思いますか？』と見学者に質問があり、皆さん無言の中で、誰かが小声で『茅？』と答えるとすぐさま大野さんより『茅という名の植物はありません。スゲ、ススキ、アシ等の総称を茅と呼びます。』との答えが返ってきました。私も、日本各地に茅場という地名が残っているので茅という植物があるものと思っていましたので、恥ずかしさを感じた次第です。

今回の細川家住宅に使用される茅は九州の阿蘇地方でとれたススキを使用しているとの事でした。ススキの刈取りは、通常枯れた後の 12 月から 3 月頃に行うそうです。刈取り後十分に乾燥させる為に何年かねかした後に使用するそうですが、保存期間は特に制限はなく、大量の茅を必要とするために何年もかけて集積するそうです。

茅葺屋根の耐用年数は日当たりと風通しが良さに左右されるということで、条件が良ければ数十年は耐えられるとのことですが、細川家住宅は北側が山に面しており、屋根の北面は苔に覆われ劣化が激しく、今回の改修に至ったという事ですが、前述の大野さんによると、それでも表面から 10cm 程度傷んでいるだけなので、今回の茅葺工事にあたっては新しい茅の使用は 3 分の 1 程度とし、3 分の 2 は下層部の既存の茅を再使用したという事です。

道具の説明の後、大野さんの案内で素屋根がかけられた現場内部を見学しました。現場の状況は平葺きがほぼ終了し、棟部の工事に取りかかるところでした。まず驚いたのは職人さんたちが若かったということでした。大野さんの若さにも驚かされていましたが、現場の職人さんたち 6 名も 30 ～ 40 才代と若い方たちでした。伝統工法の継承者が少なくなっていくなかで、頼もしさを感じた一瞬でした。余談にはなりますが、今ヨーロッパでは空前の茅葺ブームが起こっているということで、茅葺職人さんたちの活躍は海外にまで及んでいると聞きいております。工事は入母屋部分の平葺きも終了していて、大野さんより入母屋部の施工方法の説明を受けながら、ススキを使って、どうしてこのように綺麗に納めることが出来るのかと感嘆するばかりでした。茅葺屋根は茅を幾重にも積み重ねることにより雨の進入を防ぐという事は容易に理解できますが、敷き重ねる角度によっては雨漏りが発生し、敷く角度は熟練した職人技であるとの説明も受けましたが、その微妙な角度が醸し出す茅負部の茅の切口と刈り合わせられた平葺き部の色合いには何かしら魅せられるものを感じました。

見学会はその後、外壁と内部改修方法の説明を受けて終了しました。

今回の見学会に参加して、茅葺屋根の美しさを教えて頂きましたが、なぜ茅葺屋根なのかという疑問も湧いてきました。コンクリート万能の時代に育った私には、茅葺屋根は貧しさの象徴としか思えなかった時期もありますが、封建制度の時代の中で瓦葺き等が許されなかったとはいえ、茅葺屋根は生活の中での幸福感の象徴ではなかったのかと思うようになりました。徒然草の一節に「家のつくりやうは夏をむねとすべし」というのがありますが、夏に涼しい茅葺屋根は生活の知恵そのもので、その材料も人の手により作られた人工素材ではなく、安価に手に入れることの出来る自然素材であり、その集落に住む人達の相互協力によって維持可能なものであると考えると画期的なものであったのではないかと思います。伊勢神宮の 20 年ごとの式年遷宮も茅という自然素材を使用することが 1,300 年も続けられているという意見もありますが、今に生きる私たちは自然素材と向き合い、建築材料として使用するにあたり維持管理容易なサイクルを考えるのも大切なことではないでしょうか。おりしも CO2 削減が叫ばれていますが、茅葺屋根に優るものはないでしょう。しかしながら、生活に幸福感を持てなければ、先人たちの知恵も時代のある一時期の通過点としかとらわれないというのも現実です。約二千五百年前の論語が現代社会生活の心得として、そのほとんどが当てはまるということを考えれば、いつの時代にか先人たちの知恵が私たちを救ってくれる時代も来るのではないかと思ったりもしています。

玉井家（伊予市上野）測量調査

文化財・まちづくり委員会　委員長　花岡　直樹

調査に至った経緯

「伊予市を代表する庄屋建築・玉井家が取り壊される予定なので、是非とも委員会で調査して、記録保存をして欲しい。」との依頼を本田前会長と伊予市文化協会の門田会長より受け、調査を行うこととなった。聞くところによると、母屋を解体して息子さんが新しく居宅を建てるとのことであった。以前から一度じっくり拝見したいと思っていた建物であり、こういう形での調査は少し残念ではあったが、この地の一時代を築いた建物の図面を残しておこうと、調査に取り掛かった。

玉井家の概要

玉井家は、慶長年間（1596 ～ 1614）より庄屋を務めていて、位牌も天正年（1573 ～ 1591）より有する由緒ある家柄である。敷地は県道伊予川内線の上野郵便局から南、約 300m の高台に位置し、北側に家が建ち並ぶ前は伊予市内や忽那諸島の島々が見渡せたという。約 1,000 坪の敷地に母屋の他、数多くの建物が建ち並び、この地方ではまれにみる壮大な構えとなっている。

敷地は西と南が道路に面し、西の道路を隔てて、手間天満宮が建っている。西側中央あたりの長屋門（最近の建て替え）から入ると、御影石が敷かれた通路が真っすぐに伸び、北側には母屋、母屋の北と南東に 2 棟の蔵、敷地の東端には納屋や井戸屋形が建ち並ぶ。南側には 2 棟の新しい居宅がある。表鬼門（北東）と裏鬼門（南西）に当るところには建物を設けず樹林となっている。

また、母屋西側の座敷に向かっては、石垣の基礎の上に建つ厚さ 65cm の土塀に御成門が開き、その北側には鷹小屋がある。これは藩主が鷹狩りをするときに鷹匠が控えたという珍しい建物である。

玉井家の建物

前身の母屋は寛延元年（1748）大晦日の火災で焼失し、現在の建物は宝暦元年（1751）に建て替えられたものである。その後は改築が多く、創建当初の物としては西端の上段の間である座敷と二の間の 2 室が遺されている。

建物は東西軸で、桁行（東西）13.5 間、梁間（南北）6.5 間と、広大な規模を誇る。屋根は大屋根が茅葺きであったが、今は鉄板で覆われている。南面の下屋部分のみ瓦葺きとなっている。西端に一部古瓦（本瓦葺き）が残っている。

座敷・二の間はともに 8 帖で、杉の面皮柱と面皮長押が使われている。庄屋といえども農民階級なので、角柱で造ることを遠慮したものだが、同じ大きさの面皮材を揃えることは、原木の選定や木取りなど、かえって難しかったと考えられる。特に長押の隅の丸みが合っているところは、特に手間がかかったものと思われ、御当主の建物への誇りがうかがえる。間境の欄間は細い桟で菱型の幾何学模様が描かれ、その中に 7 種類の家紋があしらわれている。長押の釘隠しは座敷がうさぎ、二の間が桃の絵柄で、書院は花頭窓となっている。

元玄関であった 10 帖の部屋は、1 間半の床の間を備え、槍・弓・長刀が壁に掛けられていて、当時の繁栄を偲ばせる。また、後に改造された南側の廊下の床下には、玄関として使われていた当時の式台が残されている。その他の居室部や土間は改築されているところや新建材で仕上げられているところが多く見られるが、一部見えている丸太梁には鉋が架けられ、丁寧に仕上げられている。

母屋北側の道具蔵は 2 階建てで、意匠的にも優れた建物である。石垣の上に御影石の基礎を敷き、1 階は海鼠壁、2 階は漆喰塗となっている。2 階の窓には瓦葺きの庇が付き、彫刻が施された持ち送り材で支えられている。

その後のこと

調査を終えて建物を離れるときに、これだけの建物ともこれでお別れかと、少し寂しい気持ちを拭いきれなかったのを覚えている、現在の御当主には、松山市で重要文化財に指定されている大庄屋・豊島家住宅とほぼ同年代の建築で、伊予市では最も古い建造物の一つであること、特に座敷廻りはほぼ建築当初のままで残されていて、面皮材などの良材がふんだんに使われており、意匠的にも優れたものであることなど、この建物の価値について説明させていただいた。

すると調査から 10 日余りたったある日、門田会長より「みんなの話を聞いていると、このまま取り壊すのはもったいなく、ご先祖様にも申し訳ない気持ちになってきた。何とか座敷部分だけでも後世に伝える方法はないだろうか。」と御当主が語り始めたとの連絡をいただいた。早速駆けつけて、一度解体し修理し、新規建物の離れとして再び建築してはどうかなど、いくつかの方法を提案させていただいた。実現するかどうかはわからないが、我々の思いが伝わったことに、少し喜びを感じた次第である。

調査年月日：平成 28 年 9 月 17 日（土）
調査、図面・報告文作成：
遠藤禎誌、久保 孝、酒井純孝、菅野隆次、花岡直樹
峰岡秀和、峰岡義則、本田 壽、若松一心
伊予市文化協会：門田会長、伊予市：矢野氏、水木氏

玉井家（右）と西の手間天満宮

最近建て替えられた長屋門

長屋門から敷地を臨む　石畳の通路が見える

母屋北側の蔵　石垣の上に建つ

母屋南東の蔵

敷地南西の樹林　裏鬼門に当る

御成門（右）と鷹小屋

母屋全景

母屋の南面西側下屋の古瓦

座敷の面皮柱と面皮長押

座敷と二の間の間境の欄間

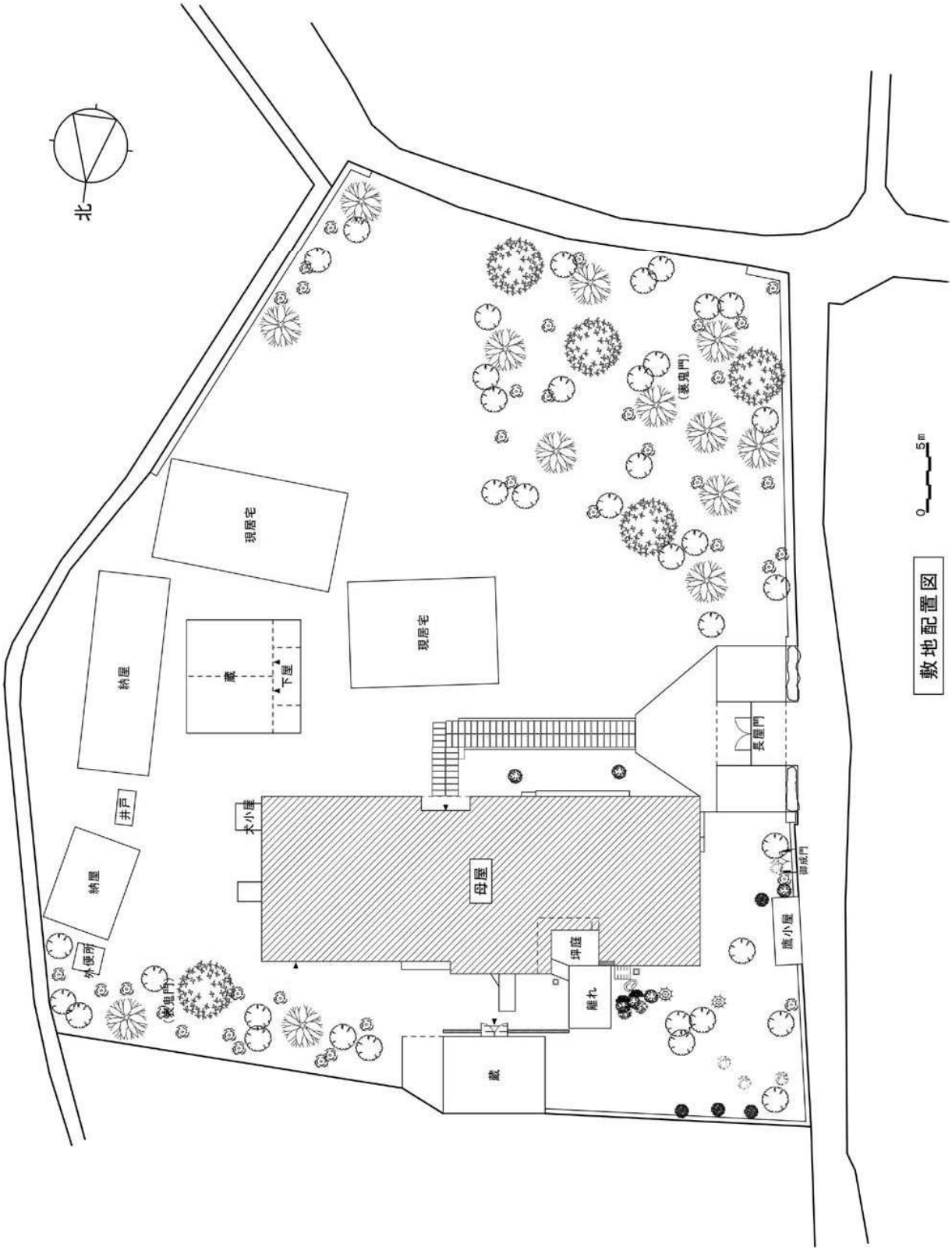
座敷の床の間と花頭窓の書院

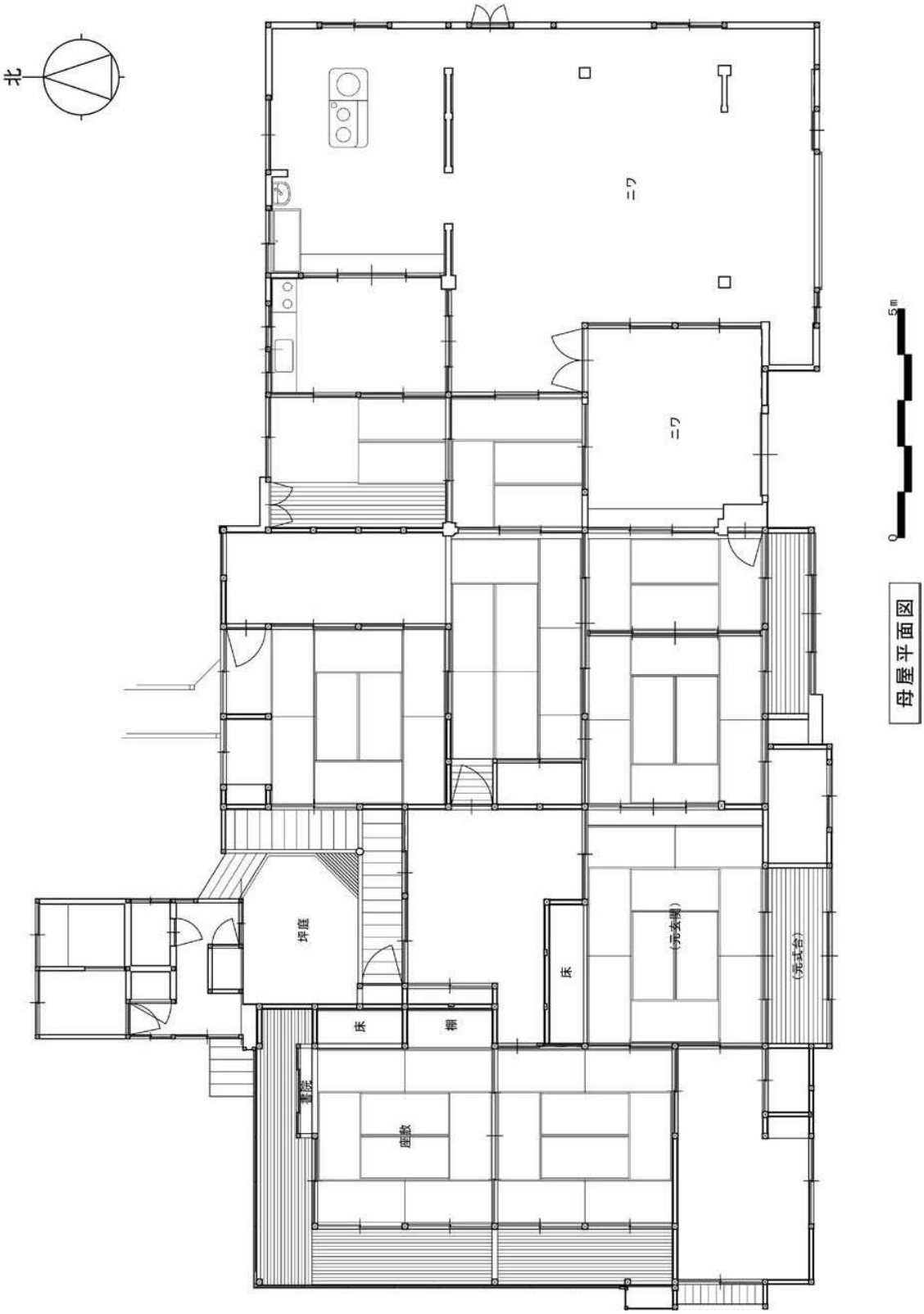
元玄関の間に飾られた弓と長刀

縁床下の玄関の間として使われていた式台

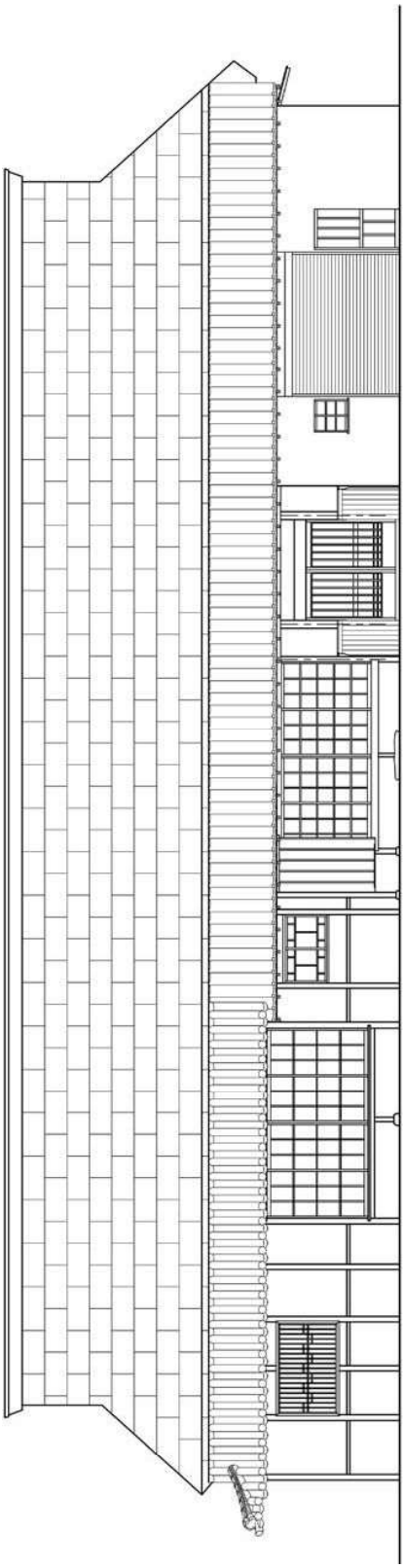
一部見える丸太梁　丁寧に鉋で仕上られている

御当主（2列目左から2人目）と調査員

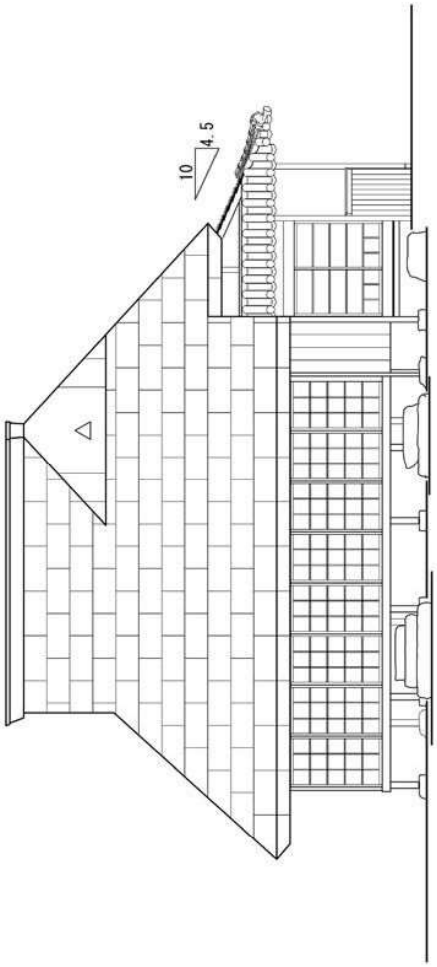

北
納屋
井戸
納屋
外便所
犬小屋
蔵
下屋
現居宅
現居宅
(裏鬼門)
(裏鬼門)
母屋
坪庭
離れ
蔵
長屋門
御成門
鹿小屋
0
5m
敷地配置図



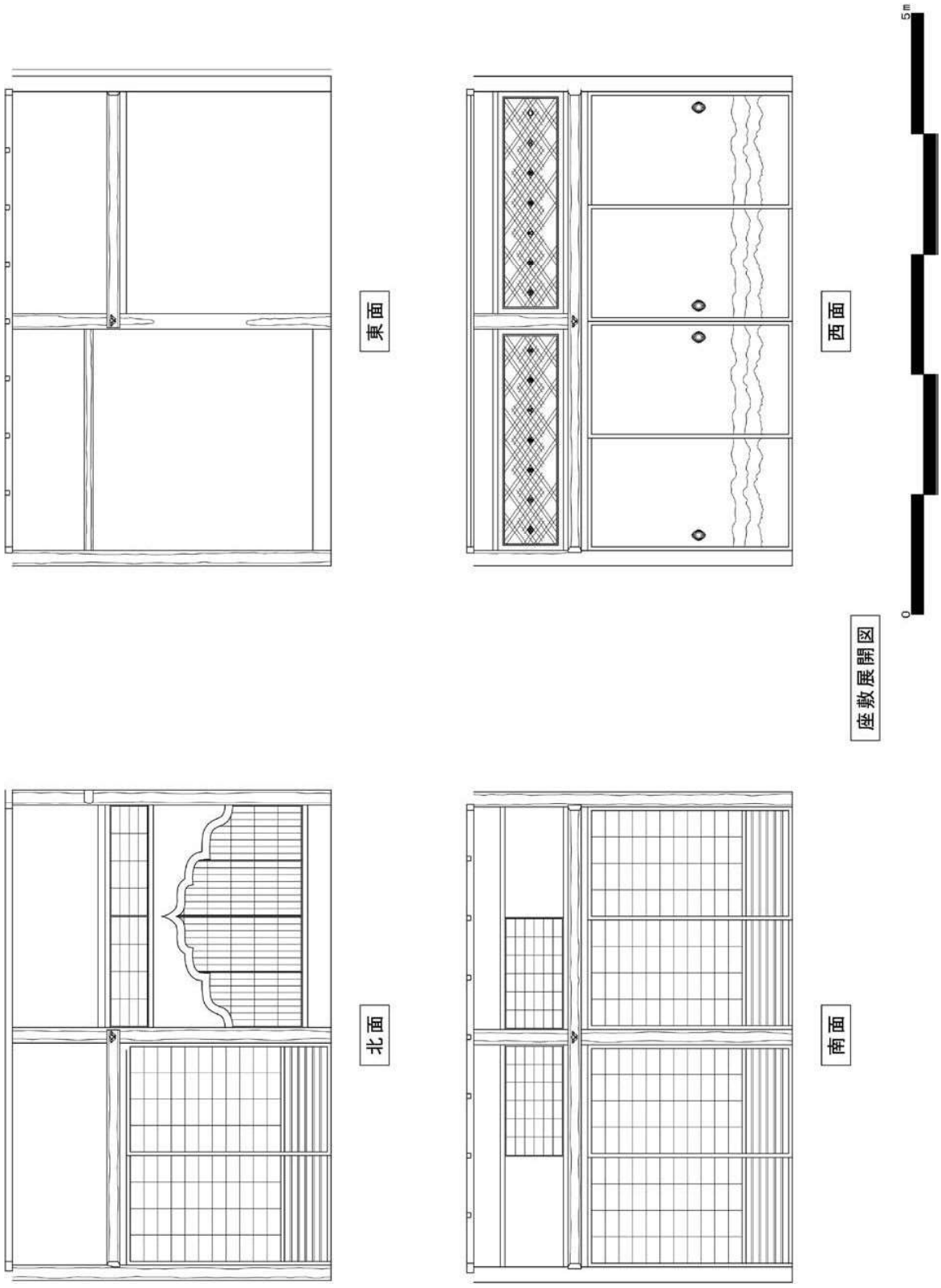
母屋平面図

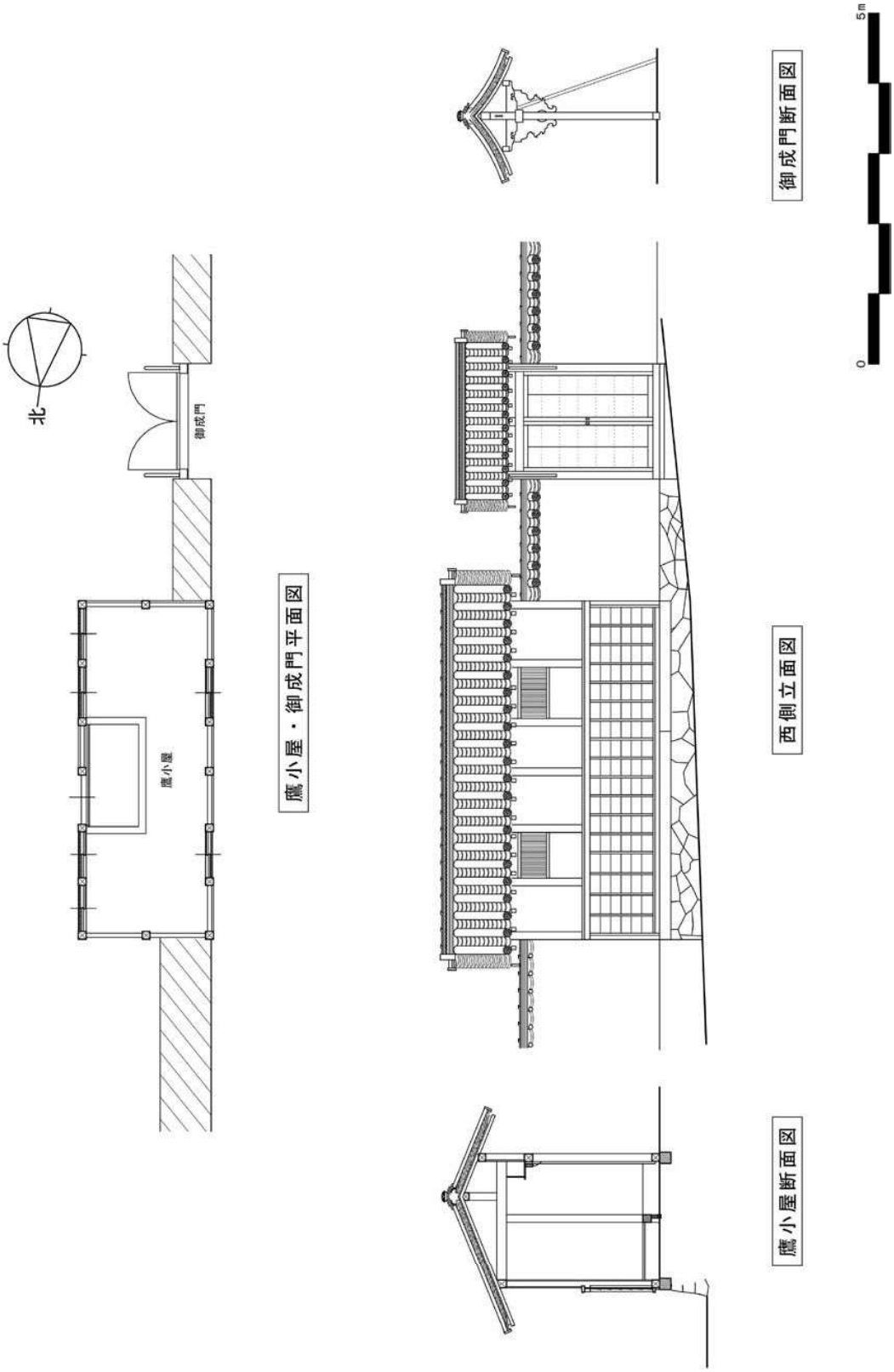


南側立面図



西側立面図


東面
西面
座敷展開図
0
5m
北面
南面


北
御成門
鷹小屋
鷹小屋・御成門平面図
御成門断面図
西側立面図
鷹小屋断面図
0
5m

支部対抗ソフトバレーボール大会 優勝報告

西条支部　西条Ａ　篠原　健治

開催日：平成 28 年 11 月 12 日（土）
場　所：丹原体育館（西条市）
参加者：129 人　15 チーム

今年は15チームが参加し熱戦が繰り広げられました。

我が西条支部は周桑支部との合併後初の大会で、新生西条支部として、西条Ａ・Ｂ　２チームを編制しての参加となりました。何故かユニフォームは両チームとも‘しゅうそう’のＴシャツです。（笑）私は西条Ａチームでの参加でした。西条Ａチームはメンバー全員が元周桑支部メンバーなのでチーム名 しゅうそう でも良かったかな。

開会式が行われ、その中でルール説明がなされました。ルールは例年通り時間制で、時間が来た時点で多く得点している方が勝ちの３セットマッチ。ただ一点「ボールに体のどこが触れてもよい。」というルールが追加されていました。「ボール蹴ってもいいんですか？・・。」「いーんです！」

試合は４つのグループリーグでそれぞれ順位を争い、その後順位に応じてトーナメント形式で最終順位を決定する方式で行われました。

〔↑準優勝 チームアンディ〕　〔伊予支部↓〕

我々西条Ａチームは初戦西予支部、今治支部、八幡浜宇和島 支部チームと降し、グループリーグ全勝でトーナメント１位の枠に入り午前中を終えました。昼食は小春日和の中、用意して頂いたお弁当を屋外でおいしく頂きました。

午後からのトーナメント戦。くじ引きの結果、準決勝では昨年優勝の四国中央支部チームと対戦。さすがに手強かったが何とか勝利しました。決勝の相手は強剛伊予支部を撃破したアンディーチーム。苦戦しましたが、同支部の西条Ｂチームの応援にも後押しされ、勝利。優勝を勝ち取りました。バンザーイ！

なお同支部の西条Ｂチームは残念ながら１３位に終わりました。来年は連覇を狙い、西条支部１･２フィニッシュに向かってがんばります。

ともあれ楽しい一日でした。今回も皆さん怪我も無く、無事終えられ何よりでした。会長はじめ、ご尽力いただいたスタッフに感謝致します。参加された皆さんお疲れ様でした。

〔チーム松平↑〕　〔宇和島チーム↓〕

〔チーム県庁↑〕　〔四国中央チーム↓〕

ソフトバレーボール大会（最下位）

今治支部選手一同

【背番号1】初めての参加でした。建築士会が主催し、一般の方々も参加できるスポーツ大会。僕たち建築士も、このようなイベントがなければ、なかなか顔を合わす機会がない。チームを組んだことにより初対面でも気軽に話せる雰囲気で和気藹々と試合をすることができた。最下位に沈んだことにより、このような文章を書く機会が与えられたことも、これから何かの縁があるのかもしれないかな。
【背番号2】スポーツを通して懇親を深められたことはとてもよかったと思います。だた、日ごろの運動不足を痛感しています。
【背番号3】交代要員がいない6人ぎりぎりでは、正直しんどかった。今治支部全体で協力する体制にするべきだと思います。今後も参加するのであれば、練習が出来る人だけでも練習するほうが良いのでは。
【背番号4】日ごろの運動不足が敗因でした。全敗したので、来年は1勝を目標に体作りをしていきたいです。
【背番号5】ぶっつけ本番で臨んだ大会で善戦の末の惜敗。初戦の気の緩みと最終戦での調子に乗るという悪い所が全部出た試合でしたが、終わってみれば悔しさとやりきった感があって楽しかったです。
【背番号6】今回で四度目の参加となったが、前回、前々回は今治チーム編成が難しく、他支部さんチームに入れて頂いての参加であった。今年は6年ぶりの今治チーム たしかあの時も原稿依頼があった気が・・・・・
6年前の忘れもしない最終（対宇和島戦）僕のサーブミスで敗退した記憶が走馬灯のように蘇り今回宇和島と対戦が有れば、リベンジと思いながら会場に向かった。
くじ引きでは、宇和島との直接対決は叶わなかったが、初戦で、八幡浜＋宇和島混成チーム！必ず勝ってやる！て思いで前半7分Bコート東側 多分10点以上差をつけて、コートチェンジ西側、なんかいけそうな気がするが、東側からの女性サーブがつぎつぎ決められ流れが悪くなっていく、こちらもミスがつづき見る間に、逆転され敗退・・・残念その後の試合もなかなか、健闘しながらも西側コートで戦うとなぜか?失点 ミスなど続き敗戦 敗戦 今治チームにはBコート西側には 魔物が居るって思わずにいられなかった。言い訳に聞こえるかもしれないが、本当に見事に西側ではボロボロで・・・（苦笑い）午後、屈辱的なリーグ分け（最下位リーグ）Bコートで連戦連敗　最終試合県庁チーム　さすがに最終戦負けたくはなっかったが、はるばる来て頂いたわけだし、一勝もさせずに帰って頂くのは忍びないし・・・（苦笑）
今回は東予開催でしたので「おもてなし」させて頂きました・・・・（涙）ってな訳で、今回、テッペン取らせて頂きました。みなさま、来年は許しませんよ・・・・

〔新居浜チーム↑〕〔チーム長岡↓〕

〔チーム会長↑〕〔西予チーム↓〕

〔大洲チーム〕

とびだせ建築士（愛媛大学教育学部付属中学校章光堂）に参加して

松山支部　河野　行信

とびだせ建築士・・・県内の高校生（建築科）の生徒を対象に、我々建築士と直接交流する機会をつくり共に学ぶことで、建築の楽しさをより知ってもらうことを目的とした活動。

11月14日（月）今年もやって来ました、とびだせ建築士。

天気は快晴！とはならず、ちょっと雨。誰のせい？などと犯人探しはせず、まずは今回の対象建物集合場所へ。

昨年は道後温泉本館でしたが、今回は愛媛大学教育学部付属中学校にある章光堂という建物。章光堂、私、普段塀の外から見るくらいでそれまではほとんど知りませんでしたが、10月18日（火）に行われた事前勉強会で花岡直樹さんに様々なことを教えていただきました。

愛媛県として宇和島歴史資料館に続いて２番目に国の登録有形文化財に登録されたこと、木造２階建ての擬洋風建築で、残念ながら設計者や施工者が不明であること、玄関には車寄せがあり、その屋根は８本のエントツ･･･、いえ、エンタシス（ここのくだりは花岡さん）をもつ柱で支えられ、柱頭はトスカナ式オーダーとなっていること、小屋組はトラスで継手の仕口や金物など洋小屋の技術を良く理解した大工の手によるものなど、今回も盛りだくさんの内容でした。しかも素晴らしいのは、実際に今も学校行事等で使用され、今後はどんどん地域に開放していきたいとのこと。建築ファンでなくとも、地元として誇りに思う建物ではないでしょうか。

さて、話は戻ります。昨年に続いて参加してもらった松山工業高校生、松山聖陵高校生も小雨の中でしたが、速やかな集合（両校の先生、いつもありがとうございます）で、愛媛県建築士会松平定真青年委員長の挨拶、長岡康広松山支部青年委員長の司会、愛媛大学教育学部付属中学校コーラス部の皆さんによる合唱（心が洗われました。）、愛媛大学教育学部付属中学校西田先生の建物に関する歴史等のご説明と、滞りなし。その後の西森勉松山支部青年副委員長の滑らかなスベリ･･･、いえ、シャベリ（いつもの安定感）。そして、各班（白石学班長と河窪茂樹班長）に分かれての現地説明。そして各役割を担ったメンバーの皆さん、まさに青年委員会メンバーここにあり、という素晴らしい進行、そして内容でした。私もオブザーバーではありますが、感動のあまり目にはうっすら涙が・・・あっ、雨粒でした。

古い建物を残していくということは並大抵では出来ないことだと思います。しかし、その昔、まだ本州その他と船でしか行き来が無かった四国愛媛に建築文化や技術の伝承があり、当時の設計士や大工が悩みながら建て、そしてそれを残してきた情熱を我々は感じ、また勉強し、次代へ繋げていかなければならないとあらためて感じた、本当に貴重な時間でした。

今回参加してもらった生徒の皆さん、両校の先生、今回ご協力いただきました愛媛大学教育学部付属中学校西田先生、そしてコーラス部の生徒の皆さん、ありがとうございました。そして愛媛県建築士会松山支部青年委員会メンバーの皆さん、お疲れさまでした。

とびだせ建築士、私自身今回も素晴らしい経験をさせていただきました。

次回も楽しみです！

（私もオブザーバーだけど頑張るよっ！）

松山聖陵高校生徒に説明する　白石　学委員

松山工業高校生徒に説明する　河窪茂樹委員

「八幡濱 港拓 2016」における子どもガイドの育成

女性委員会　眞田井　良子

昨年に引き続き、第２回目の開催となりました。昨年、八幡浜の広範囲の場所を一堂に公開したため、１日では回りきれなかったとのご意見がありましたので、今年度は「えひめいやしの南予博2016」に合わせ、６月、８月、10月の合計３回に分けて開催いたしました。その第１回目からご紹介したいと思います。

【第１回 八幡浜まちなみウォーク】

開催日時：2016年6月5日（日）10：00～13：00
開催場所：八幡浜みなっと～梅美人～愛宕山～八幡神社～旧八幡浜市立図書館～大正湯～八幡浜みなっと
講　　師：菊池清治邸を活かす会 岡崎直司
主　　催：八幡浜市 With 八幡濱港拓実行委員会
参加児童：江戸岡小学校６年生 11 名
参 加 者：約800人

江戸岡小学校の６年生児童は、「総合的な学習の時間」を利用し、ガイドを行う予定の地元の「八幡神社」「旧八幡浜市立図書館」「大正湯」の３ヶ所を学習しました。説明してくださる方の話を集中して聞き、たくさんの質問ができました。ウォークの当日は、４人一組で建物などの特徴や歴史を大きな声でハキハキとガイドでき、来場された方にも「はじめて知りました」「分かりやすかったです」などとご感想をいただきました。

【第２回 日土小学校見学会】

開催日時：2016年８月７日（日）９：00～16：00
開催場所：日土小学校～八幡浜みなっと
講　　師：菊池清治邸を活かす会　岡崎直司
主　　催：八幡濱港拓実行委員会
（（公社）愛媛県建築士会女性委員会 他）
参加児童：千丈小学校6年生2名/江戸岡小学校6年生１名 / 日土小学校５年生 13 名
木村保一顕彰会６名
参 加 者：218人

今年度より、日土小学校では「総合的な学習の時間」を活かして、４年生で学校のことを調べ学習し、５年生の夏休みの見学会に合わせて学んだことを来場者の皆様へガイドを行うことが始まりました。

８月の日土小学校見学会では、市内に残る松村正恒氏の設計した「川之内小学校」にて学んだ経験のある児童たちが分かりやすく説明してくれ、学校のことが好きという気持ちが伝わってきました。

また、特に意欲のある江戸岡小学校の児童が「旧八幡浜市立図書館」を調査し、当日その内容と、今後どのように使っていきたいかということまで発表してくれました。この児童は、将来建築家を目指しており、松村正恒さんを紹介するために、ル・コルビュジェの「近代建築の５原則」まで紹介してくれたほか、現状の劣化を心配し、今後市民が使える場所になるように整備してほしいとの提言までしてくれました。

木村保一顕彰会さんは、「日土東小学校」を設計した「木村保一」さんの設計した建築の紹介や、閉校後の利活用を具体的に話してくださり、今後八幡浜の木造建築をどのように未来へ残していくべきかヒントをくださいました。

しまなみアートツアー

女性委員会副委員長　近藤　佳代

【第３回 保内まちなみウォーク】

開催日時：2016年10月29日（土）10：00～13：00
開催場所：日土小学校～八幡浜みなっと
講　　師：保内ボランティアガイドの会
主　　催：八幡浜市 With 八幡濱港拓実行委員会
参加児童：川之石小学校6年生20名/保内中学校43名
　　/川之石高等学校8名
参 加 者：約200人

川之石小学校では、夏休みの宿題で、地域のことを調べて模造紙にまとめていた児童もおり、ウォークの日を参観日に設定し、６年生全員でガイドを行いました。保内中学校では、「総合学習」の時間に地域のことを学び、ウォークの直前にも中学校にて建物や街並みの勉強会を開催して本番に臨みました。川之石高等学校の生徒さんは、誘導を担当してくれました。保内地区では、地域のことを調べる学習を継続して行われております。今回、たくさんの児童・生徒の皆さんがガイドや誘導を行い、地域の魅力を発信し、参加者にとっても満足度の高いウォークとなりました。

今年度は、えひめいやしの南予博があったことや、市の教育委員会の皆様が応援してくださったこともあり、子どものガイドを89名育成することができ、全員に「八幡濱観光大使」を授与致しました。地域のことを学び、発表し、伝えていくことを継続して行えるよう、来年度も発表の場をきちんと用意していきたいと思います。

ご協力くださいました皆様、本当にありがとうございました。

平成28年11月３日（文化の日）に、女性員会主催の「しまなみアートツアー」を開催しました。士会会員、一般会員合わせて14名の方が参加しました。

今治港に新しく出来た港交流センター（通称：はーばりー：原広司氏設計）に集合の後、車で大三島へ移動。

伊東豊雄氏設計のミュージアム３棟を見学したり、パワースポットとしても有名な大山祇神社を見学したり、伊東豊雄氏による「日本一美しい島・大三島をつくろうプロジェクト」の建物を見学したり、伯方の塩工場を見学したりと、文化の日にふさわしく、しまなみのアートや文化を満喫しました。

見学している時に印象的だったのは、大山祇神社参道にある「みんなの家」（「日本一美しい島・大三島をつくろうプロジェクト」関連建物）を見学している時に、向かいの家にいたおじさんが、「この建物はね、東京から来た伊東豊雄先生がね。。。」と話しかけてきたこと。伊東豊雄建築ミュージアムが出来て５年。「日本一美しい島・大三島をつくろうプロジェクト」が始まってから２年が経ちますが、伊東豊雄氏の活動が地域住民の方にも受け入れられ認知されていることに感動しました。

実はツアーで予定していた「象の鼻休憩所」を案内するのを忘れてしまったというハプニングがあったのですが、大島では瀬戸内海の美しい夕焼けを見ることができ、楽しくツアーを終えることができました。参加者の皆さんからも「とても良かった」と評価していただけました。大三島のプロジェクトは今後も継続中なので、また機会があれば新しいツアーを企画したいと思います。

第２回建築士会館建て替え検討委員会報告

会長　寺尾　保仁

日　時　平成28年11月8日　15：00～
場　所　愛媛県建築士会5階　会議室

議　事

①　スケジュールについて

・全体としては平成29年度通常総会に主な資料を提出して、建設のための承認を頂く事で決められた。
・総会の承認後本設計業者選定を行い、平成29年度中の完成を目指したい。
・全体の計画を遂行するには、平成29年1月の第6回理事会までに基本設計を行う必要がある。
・基本設計は青年委員長に確認した上で青年委員会にお願いする事となった。その場合進捗状況は逐次報告をお願いした。
・1月の理事会までに建設予算、その他移転費用、諸経費等の基本調査を行う事。

②　事務所協会の意思の確認について

・事務所協会への意思の確認を即刻に文章で行う

③　建物の規模等の検討について

・構造は、原則鉄骨造とする基本設計の段階で別案があれば検討する。
・階数は、各入居者フロアーと会議室フロアーの原則3階建てとする。
・広さは敷地面積から、最大建蔽率を上限とする。
・欠席委員からバリアフリーも考慮すべきとの意見もあった。
・松山支部の入所も検討する。

④　設計・実施に当たっての重要事項について

・業者選択について今後検討する

⑤　資金調達について

・今後建物規模、入居者決定の上、会員からの借入、寄付、事務所協会からの協力、融資を含めて検討すべきである。

⑥　その他

・会員からの意見について

　建設に対して盛り上がりが欠けている様であるので、委員はそのことを十分意識して進めて頂きたいとの意見があった。

以上報告書抜粋であるが、全文は事務局に確認してください。

出会い

四国中央支部　岸　　良一

出会いはいつも偶然なのか
それともとくべつな理由があるのか
いずれ答えは見つからないから
そのすべてを奇跡と考えたっていいよね

小田和正さんの歌詞の一節ですが、皆さんにもたくさんの出会いがあると思います。大学４年生の時には、第一志望の就職活動に失敗して落ち込んでいたところへ、大学の少林寺拳法部の先輩から連絡があり、熱心に誘っていただき何とか就職することができました。就職１年目は大阪本社で住宅の施工研究をしました。研究所は心斎橋のビルの 11 階といういろんな意味で大変便利な所にありました。仕事はとても楽しく、夜遅くまで仕事したり飲みに行ったりする毎日でした。２年目以降は九州支店の博多に移動し住宅の企画と積算をしました。初めは部材を間違えて積算してしまうことが多く、現場の工務店さんによく怒られたことを覚えています。この会社に３年３か月間いましたが、父親が他界したこともあり愛媛に戻って来ることにしました。

弟が探してきてくれた四国中央市（当時は伊予三島市）の設計事務所になぜか妹に付き添われて面接に行きました。無口な私よりしっかりしている妹の方がたくさん質問していたことを思い出します。

設計の仕事は知らない事ばかりで、毎日がとても新鮮でした。最初の仕事は小学校の体育館でした。但し、自分ができる仕事は限られていて、簡単な図面の修正と積算だったと思います。期限に間に合わすために多くの人が毎日やってきて夜中まで、時には朝方まで仕事をしましたが、まったく苦痛ではなく、とても楽しい経験でした。独立してから公共の仕事を何件かやりましたが、この時の経験が大きかったと思います。多くの失敗をしながらも沢山の経験をさせてもらった９年間でした。

自分で設計事務所を始めたのは 34 歳の時です。既に結婚もして子供も２人おりましたので、ほんとにやっていけるのだろうかと心配しながらの独立でした。何の当ても仕事もなく独立しましたので、最初は建設会社や工務店に挨拶回りに行きました。アポも取らずに突然行くもんですから、まったく相手にしてくれませんでした。

いろんな事務所の手伝いをしていましたが、初めてきた住宅の仕事の時にはワクワクしながら模型を作りプレゼンしたのを覚えています。独立して数年は仕事が少なく生活が大変でしたが、続けているといろんな人との出会いがあり、少しずつネットワークがひろがっていったように思います。技術が優れているから仕事が来るのではなく、人と人とのつながりで、いろんな人が仕事を紹介してくれるようになり、何とかやっていけていると思います。私にバトンを渡してくれた尾藤淳一さんとの出会いもこの独立前後だったと思います。

建築士会との出会いは 26 歳の頃だったと思います。建築士会主催の１級建築士受験講習会に参加するには入会した方が割安だということで入ったように思います。早くから建築士会に入っていましたが支部の総会にもあまり行ったことが無い様な会員でした。そんな私に CPD 委員会に入らないかと声を掛けてくれたのが現在の会長の寺尾保仁さんです。何故かわかりませんがあっさり引き受けてしまったように記憶しています。（寺尾会長の人柄でしょうか？）ベテランの CPD 委員さんの中で私一人よくわからないまま委員会に参加させてもらいました。お陰様で、レクバレー大会でも県内の多くの人が声を掛けて下さるようになりました。練習にも参加せずに私がフル出場したせいではなく、他のチームが強くなったからだと思いたいですが、残念ながら四国中央支部チームは３連覇を逃してしまいました。四国中央支部の皆さん紙面をお借りしてお詫びします。すみませんでした。私自身はレクバレー大好きなので、次こそは練習に参加してレベルアップして臨んでみたいと思います。よろしくお願いします。下の写真は昨年度優勝の記念カップと４位の賞金のみを持って帰ることになった四国中央支部チームのすばらしいメンバー達です。

設計事務所を始めてついに 20 年目に入っています。良い先輩そして良い師匠に出会えたこと、良いクライアントそして建築士会の皆様に出会えたことに奇跡を感じ、感謝したいと思います。これまで山あり谷ありでしたが、今回けんちくの輪のバトンを頂いたことで少し振り返ることが出来ました。バトンを渡してくださった尾藤淳一さんに感謝しています。ありがとうございました。

私が次にバトンを渡すのは隣の新居浜支部の鴻上八大さんです。よろしくお願いします。

建築の輪

西予支部　渡辺　建文

I. まずは、自己紹介から

現在、西予支部　事務局を担当している“渡辺”です。

この業界に入って、35 年目になります。

学校卒業後、地元に帰省し、地元建設会社に入社し、現在に至っております。RC・鉄骨・木造 と、建築全般です。

当初は、「いずれ、設計事務所を」と思っていたと思いますが、結局“一級”も取れないまま施工業者で、監理業務を今だに続けています。

と、言っても 所詮“器”のことですので、「自分の能力は、こんなものかな」と、今は思っておりますが‥‥。

実際“脳”も“体”も、ついていかなくなっております。若い者達が 頑張ってくれますので、“それなり”の状態です。

今回、土居原さん（西予支部の、マスコット的存在）から 引き継ぎ、当投稿に参加させていただく事になりました。

II. 回想録から

当初“木造建築”は、「時代に合わないと」思っていました。然るに、「土居家改修工事」に携わり「木造がおもしろく」感じるようになったと思います。

野村町　惣川地区　土居家

この現場で、犬伏先生からの紹介で、宇和島支部の山本文義氏に出会い、匠の技を見せられて 考え方が変わったと思います。（今でも、私の“お師匠様”です。）

［この人は、歴史上“尺鉋”で、最初に木を削れた人です。］

四国第 42 番霊場・仏木寺 楼門

実際こうした大工さんの仕事を見ると、“木造”の昔からの【仕口】に、感心させられます。

これは本当に、ある意味【おもしろい】です。

【仕口】が出来れば、“木造”は本当に強くなると思いました。

「基準法」には、適合しないかもしれませんが、現実この工法の方が強いのは、確かだと私は思っています。（先日の“定期講習”においては「伝統工法」の“考え方”が、少し変わってきているようでしたが・・・。）

野村町　三嶋神社　設計：デザインシステム

仕事上、縁あって、「仏木寺楼門」「三嶋神社本殿」に、関わる事が出来ました。

両方共、“伝統工法”そのものです。本当に、良い経験が出来たと、周りの環境に感謝しております。

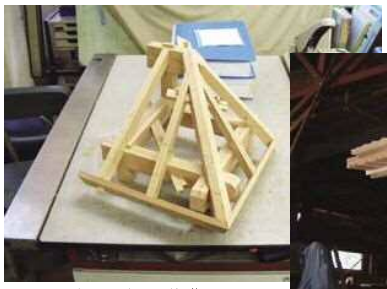
話は変わりますが、「技能グランプリ」という競技が有り、おもしろい出題が毎回有ります。

“第２４回？技能グランプリ「建築大工」職種競技課題”

ずいぶん前の課題ですが、“頭の体操”になります。

挑戦しようと言う方があれば、データで送れます。

（知り合い大工関係者 10 数人に渡しましたが、だれも返答は有りませんでした・・・・。）



1/3 スケール作品

楼門 1/5 模型

III. 最後に（今まで、参加されていない方に）

何においても同じですが、当“建築士会”でも、「参加」すれば、それなりに“おもしろくなる”（出来る）と思いますし、「しなければ」“それなり”でしょう。

「する」か「しないか」は、個人の判断でしょうが‥‥。

私などは、取るに足らない人間ですが、周りの人達により、何とか過ごして来たように、思っております。

やはり、“人のつながり”というものは 素晴らしいと思います。

私が次にバトンを渡すのは宇和島支部の山本文義さんです。よろしくお願いします。

専攻建築士（新規・更新）登録申請受付期間のお知らせ

受付期間：平成29年1月4日（水）～2月28日（火）
新規は窓口のみの申請となります。（WEB申請は出来ません。）
要件　①建築士免許取得後5年以上の実務実績
　　②責任ある立場での実務実績3件以上
　　③直近1年間のCPD単位12単位以上　となります。

更新は窓口とWEBの申請が選べます。（WEBは会員限定）
更新要件　①2012年1月1日～2016年12月31日に取得したCPD単位60単位以上
　　②資格取得30年以上の方で、定期講習または特別認定講習受講者
・専攻建築士の登録期間が切れてしまっているかたも更新申請が可能です。
　申請書や費用等詳しくは（公社）愛媛県建築士会のホームページでご確認ください。
　http：//www.ehime-shikai.com/

☆会員の皆様、住所等が変更になった時には事務局までお知らせください。（FAX 089-948-0061）

公益社団法人　愛媛県建築士会

会員住所等の変更届出

この様式は愛媛県建築士会の会員名簿データの変更のみです。
建築士のデータの変更には使用できません。

【正会員・準会員】　　支部　　年　月　日

ふりがな 氏　名		生年月日	大 昭　年　月　日 平	性別	
変更部分のみ記入して下さい	現住所	〒　－ TEL　FAX			
	勤務先　名　称				
	勤務先　所在地	〒　－ TEL　FAX			
	建築士資格	一級・二級・木造・準	登録年月日　昭・平　年　月　日 登録番号　第　号		

版画

題：「ポコペン・ホーロー・グラフティー」
　　山田 きよ

［表紙の版画について］
おおず赤煉瓦館に降る雪と、その隣にありポコペン横丁に多く飾られているホーロー看板とのイメージ画である。
配色とデザインが魅力のホーロー看板は、過ぎ去りし子供の頃の懐かしい時代の空間が焼き付けられている。
最近ではほとんど見かけなくなったが、たまに見かけると心が和み安らかな気持ちになってくるのは私だけだろうか…。

表紙作者　　山田　きよ　プロフィール

1959　喜多郡五十崎町（現内子町）に生まれる
1980　松山デザイン専門学校卒業
1982　広告デザイン会社を退社し、家業の竹材業に就く
1988　独学で切りぬき手法のシルクスクリーン版画を初制作
　　以後、内子町内子座や大凧合戦のポスターを手がける
1993　初の個展
2003　愛媛県文化協会奨励賞
2012　個展回数が 100 回となる
　　（本名　　山田 清昭　内子町在住）

あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、広く異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしていきます。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年６回発行となります。
（尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承下さい。）

「いしづち」の本年度の原稿締切日
平成 29 年　３月号（115 号）　　平成 29 年１月 19 日（木）

※ 校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。
※ １ページ写真込みで 2150 文字（25 文字 ×43 行 × 横２段）の WORD 様式を事務局で用意していますのでご活用ください。
写真は１ページ当たり３枚程度まで題名を付けて添付してください。
また宜しければ投稿者の写真（免許写真程度の顔写真）を添付してください。
会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。
（尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかも知れませんので、予めご了承下さい。）
この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にまで、建築についての対話等の輪が広がれば、と願っています。

情報・広報委員会

読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せ下さい。お待ちしています。

「いしづち」編集委員会（士会事務局内）宛
ー FAX 948-0061 ー

編集後記

「来年のことを言うと鬼が笑う」と言われていますが、この編集後記は締め切りの都合上、その鬼に笑われながら書いています。とは言え、まるっきり想像で書くわけにもいきませんから、私は今「バック.トゥ.ザ.フューチャー」のデロリアンに乗って、一足早く平成29年のお正月にいます。（ただし、宝くじの当選番号は分かりません。アシカラズ。）

考えてみれば早いもので、私がこの広報委員長を拝命して3回目のお正月がやってきました。
正月早々、強引なコジツケでこの3に因んで話を継げば、3は方位で言えば東、三碧木星、季節は春、色は青になります。
ということで、新しい年を迎え、東からの新しい光を浴びて、老いも若きも心をリセットして、また「青春」から一年を始めてみましょう。

（玉乃井　公和）

〈いしづち〉2017／1
平成 29 年 1 月発行
発行人　**会長　寺尾　保仁**
発行所　**公益社団法人　愛媛県建築士会**
〒790-0002　松山市二番町四丁目1-5
TEL（089）945-6100　FAX（089）948-0061
http://www.ehime-shikai.com　E-mail：info@ehime-shikai.com
印刷所　明星印刷工業株式会社
情報･広報委員会･広報委員
委 員 長　玉乃井公和　　副委員長　大上　恵子
編集委員　越智　麻衣　　渡邉　道彦　　山本　晶子　　大平　将司